

## 指示対象のズレと特殊な語形変化(2) -- 「キツツキ」及びその関連語彙を対象に--

著者	太田 斎
雑誌名	神戸外大論叢
巻	64
号	4
ページ	63-96
発行年	2014-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001661/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001661/</a>



## 指示対象のズレと特殊な語形変化（2） ——「キツツキ」及びその関連語彙を対象に——

太 田 齋

### § 6.1. 「キツツキ」と「ヤツガシラ」そして「ハト」、「キジバト」

本節で扱うのは“戴胜ヤツガシラ”との混同例である。「ヤツガシラ」とはブッポウソウ目の鳥で、カワセミは近縁種らしい。方言語形に幾つかのタイプがある。本節ではそのうちの“屎蹦蹦”、“屎咕咕”など“屎”で始まるものを取り上げる。なお、以下「ヤツガシラ」語形に限らず、議論の対象となる「キツツキ」等、他の語彙に現れるものも含め、ku kuのような音形を含む語形（他に例えば“姑姑”、“咕咕”などの表記もある）を類型として漢字表記するに当り、特に区別する必要の無い場合は、“咕咕”という表記で一括する。

#### “啄木鸟”

四川西昌：屎蹦蹦  $^c\text{ɣ} \text{əpoŋ} \text{əpoŋ}$  啄木鸟 普通 3713 ←→ “戴胜”

cf. 云南永胜：屎蹦蹦  $s_1^{42} \text{poŋ}^{434} \text{poŋ}^{434}$  戴胜，鸟名 省志 482、县志 695

cf. 云南吴贡：屎啍啍 戴胜 462

山西平鲁：树铮铮  $su^{52} \text{pəu}^0 \text{pəu}^0$  啄木鸟 研究 152

山西阳高：树奔奔 啄木鸟 629

内蒙准格尔：树蹦蹦 啄木鸟 552

河南长垣：树梆梆 啄木鸟 572

山西天镇：树铮铮  $\text{ɣu}^{32} \text{pɤŋ}^{31} \text{pɤŋ}^{31-0}$  啄木鸟 37

河北涿鹿：树铮 啄木鸟 595

山西偏关：树铮子 啄木鸟 669

#### “戴胜 1”

云南巧家：屎姑姑  $s_1^{53} \text{ku}^{44} \text{ku}^{44}$  戴胜 94 ← “鸣鸠鸠”？

云南玉溪：屎姑姑  $\text{ɣ}^{51} \text{ɣu}^{44} \text{ɣu}^{44}$  戴胜 126 ← “鸣鸠鸠”？

云南安宁：屎咕咕  $\text{ɣ}^{53} \text{ku}^{44} \text{ku}^{44}$  戴胜 90 ← “鸣鸠鸠”？

云南保山：屎咕咕  $\text{ɣ}^{53} \text{ku}^{42} \text{ku}^{42}$  戴胜鸟 110 ← “鸣鸠鸠”？

cf. 云南大关：屎姑姑  $s_1^{53} \text{ku}^{55} \text{ku}^{55}$  布谷鸟 150

四川西昌方言データ所拠文献の「普通」とは《普通话基础方言基本词汇集》のこと。「キツツキ」を現わす同方言の“屎蹦蹦”は類例としては“树铤铤”（ここでは暫定的に韻母の如何に拘わらず、この漢字表記で第二、三音節が p-p- となっているタイプを一括する）があるが、第一音節が“屎”となっている例は他に無い。一方、“戴胜”も“屎绷绷”という語形の報告例は管見の及ぶ限りでは、雲南永勝の1例のみ。類例の“屎啍啍”も同じ雲南の呉貢の1例のみ。“屎咕咕”という語形は雲南に複数報告例があるから、「キツツキ」を指す“树铤铤”と「ヤツガシラ」を指す“屎咕咕”が混交を起こして、中間形態の“屎啍啍ヤツガシラ”が生まれたのであろう。そして更には指示対象の混同も生じて、方言によっては“屎蹦蹦”で「キツツキ」を、またほとんど同様の語形である“屎绷绷”で「ヤツガシラ」を指すことになったのであろう。

“屎蹦蹦キツツキ”も“屎绷绷ヤツガシラ”も孤例である。もちろん劣勢方言に個別に起こった特殊な変化であれば、特殊なのであるから孤例であっても不思議ではないが、やはりインフォーマント若しくは調査者の単なる個人的な間違いである可能性も現時点では排除できない。とは言え、以下の記述は「カッコウ」と「ヤツガシラ」の混同であるが、このような混同は昔からあったようで、「キツツキ」と「ヤツガシラ」の間の混同もまた昔からあっても不思議ではない。

戴鳩、戴絨、鷓鴣、澤虞、頂鷓、尸鳩，戴勝也。

[王念孫] ……按《爾雅》“鷓鴣”即“布穀”，非“戴勝”也。……

《廣雅疏證》pp.714-715 《尔雅 广雅 释名 方言 清疏四种合刊》上海古籍出版社，1989.8

cf. 鷓 鷓鴣、鷓脹，今布穀也。…《廣韻》脂韻“尸：式脂切”小韻中

この記述に見える“尸鳩，戴勝也”、“鷓鴣，即“布穀”の“尸”、“鷓”と“屎姑姑/屎咕咕/屎咕咕”の“屎”、“姑/咕/咕”と“鳩”は何らかのつながりがあるものであろうか。“姑/咕/咕”は“鳩”と中古で同じ見母字であったとはいえ、韻母の形が違いすぎるし、“鷓鴣鳩”のような重ね型の語形の報告例はおろか、現代方言に“鷓鴣”という語形も見当たらない。“屎姑姑(姑)/屎咕(咕)/屎咕(咕)”と“尸鳩/鷓鴣”では音声的にかなり隔たりがあるようであるが、関係する余地もあるので、とりあえずは検討してみるべきだろう。以下は“鳩”が拗介音を失ったと解釈できそうな例である。

## “鸽子”

- 山东掖县：鹁鸽 pu<sup>55</sup> ka<sup>0</sup> 鸽子 61  
 山东宁津：鹁鸽 pə<sup>53-44</sup> kou<sup>0</sup> 鸽子 75  
 山东利津：鹁鸽 pə<sup>53-55</sup> kou<sup>0</sup> 鸽子 97  
 山东利津：鹁鸽 ɹpə · kou 鸽子 普通 3712  
 山东临沂兰山区：鹁鸽 pu<sup>53-55</sup> kəu<sup>0</sup> 鸽子 临沂 207  
 山东临沂河东区：鹁鸽 pu<sup>53-55</sup> kou<sup>0</sup> 鸽子 (=临沭) 临沂 207  
 山东烟台：鹁鸽子 pu<sup>7</sup> · kour 鸽子 普通 3712  
 河北南皮：鹁鸽 po<sup>54-35</sup> kou<sup>20</sup> 鸽子 917  
 河北冀县：补高 pu<sup>55</sup> kau<sup>0</sup> 鸽子 719  
 河北武邑：补告 pu<sup>55-213</sup> kau<sup>0</sup> 鸽子 829  
 河北安平：布鸽 pu<sup>15</sup> kau<sup>51</sup> 鸽子 570  
 河南原阳：鸽鸽 ɛkɿ · kao 鸽子 普通 3712 Z 变?  
 cf. 山西临汾：楼鸽 ləu<sup>42</sup> kau<sup>0</sup> 鸽子 72 不完整的叠韵化 (韵尾一致)?

## “斑鸠”

- 安徽安庆：鹁勾 po<sup>ɔ</sup> ɛkeu 斑鸠 普通 3711  
     斑鸠 ɛpan ɛtɕieu 斑鸠 普通 3711  
     cf. 鸽子 ko<sup>ɔ</sup> · tsɿ 鸽子 普通 3712  
 安徽安庆：鹁鸠 p<sup>h</sup> u<sup>55</sup> kieur<sup>31</sup> 斑鸠 市志 1730  
 安徽安庆：鹁钩儿 pu<sup>?</sup> kiər 斑鸠<sup>1</sup> 省志 158

“鸽子” 举例末尾の臨汾の例以外の“鸽子”は、その語源が“鹁鸽”であるとするならば、第二音節がこのような音形へと変化する音声環境にはない。もし特殊な変化で kau, kəu のような音形が成立したのであれば、それは syntagmatic な変化ではなく、paradigmatic な変化によるものだろう。その要因について今のところ明らかにはし得ない。同様に paradigmatic な変化によるものであるとしつつも、“鹁鸽”ではなく、“鹁鸠”が語源であって、kau, kəu のような音声形式は“鳩” \*kiəu→kəu のように中古音から拗介音を脱落させて成立したと見る余地もある。末尾の“斑鸠”の安徽安慶の例は注釈が必要である。《普通话寄出方言基本词汇集》pp.1751-1768 の「同音字表」では“勾沟钩” keu (阴平)，“揪鸠罔灸纠” tɕieu (阴平) となっており (pp.1761-1762)、市志でも音韻体系の説明部分で“周口抽”の韻母は eu、“刘又九”は ieu となっているのだが、『市志』の以下の語彙を参照されたい。

1 kiər は原文では kiər? とあるが、誤りと見做して訂正した。

- 安徽安庆：八鳩儿 pa<sup>55</sup> kieur<sup>31</sup> 八哥 市志 1730  
 cf. 安徽安庆：八钩子 pa<sup>55</sup> kəu<sup>31</sup> tsɿ<sup>0</sup> 八哥 省志 158  
 安徽安庆：土狗子 t<sup>h</sup>eu<sup>213-35</sup> kieu<sup>213</sup> tsɿ<sup>0</sup> 蜈蚣 市志 1730  
 安徽安庆：牙狗 ia<sup>35</sup> kieu<sup>213</sup> 公狗 市志 1730  
 安徽安庆：草狗 ts<sup>h</sup> au<sup>213-35</sup> kieu<sup>213</sup> 母狗 市志 1730

eu, ieu という二つの異なる韻母が存在するが、中古の開口由来のものうち、  
 どうやら牙喉音声母の場合に限り（現在確認できるのは k- の例のみ）、ieu と  
 結びつくことがあるようである。声調を除外して考えると、『市志』に見える  
 “鳩狗 kieu” と『省志』の“钩 kəu” は同一音声を指しているかのようである  
 が、『省志』の“鶉钩儿 pu? kiər 鶉鳩”、“八钩子 pa<sup>55</sup> kəu<sup>31</sup> tsɿ<sup>0</sup> 八哥” の音声表記を  
 見ると、keu とは別に kieu という字音が存在するようにも思える。後者であれば  
 kieu は音韻体系の説明で指摘漏れということになる。また、これらの文献  
 の記述に一貫性が欠けていて、口蓋化の度合いが強く、例えば keu にも kieu  
 にも聞こえるような音価になっているものが、音韻体系の説明では前者に表記  
 し、語彙集部分では後者に表記するというように音声表記に矛盾が見られると  
 いうことであろうか？ そうであれば厳密には ceu ~ cieu のような表記をす  
 べきところ、keu、kieu のような表記になっているのは音韻論的な配慮による  
 ものと考えべきだろう。安慶の上掲例を統一的に解釈するならば、kieu と  
 teieu は同音ではない。なお不明な点はあるが、ここで『普通』“鶉勾 鶉鳩” の  
 “勾” は“鳩” が本字である可能性があり、異なる方言層に属する keu が、特  
 定の常用語彙の中で保存されて、通常の teieu と並存状況にあると考えること  
 ができる。但しそれが kieu のような字音であるならば、拗介音を失った字音  
 とは見做し難い。

興味深いことに山東では報告例無く、河北でもほとんど例が見当たらないの  
 ではあるが、尤韻及びこれに相配する去声宥韻所属の常用字には以下のような  
 反映がある。

### “休”

- 河南获嘉：休~走 xou<sup>33</sup> (阴平) 研究 91  
 河南洛宁：休 谓之駒 波多野 9/41  
 甘肃陇西：把“不要怎样”说“屋 (/ hou /) 怎样”; …。“屋”即古音“休”的  
 音转 710 ←休 (阴平调值为 21 704)

## “牛”

河南获嘉：牛～肉 ou<sup>31</sup>(阳平) 研究 91河南洛阳：“牛” yxu<sup>42</sup>(阳平)；niu<sup>42</sup>(阳平) 志 43河南洛宁：屎旁牛 s<sub>l</sub><sup>21</sup> p<sup>h</sup>aŋ<sup>53</sup> ou<sup>53</sup> 屎壳郎 601山西运城：屎胖牛 s<sub>l</sub><sup>53</sup> p<sup>h</sup>aŋ<sup>0</sup> ŋou<sup>13</sup> 蜣螂 志 39山西临猗：屎盘牛 s<sub>l</sub><sup>53</sup> p<sup>h</sup>æ<sup>20</sup> ŋəu<sup>20</sup> 屎壳螂 638山西吉县：粪传牛 fei<sup>33</sup> p<sup>h</sup>æ<sup>13</sup> ŋou<sup>13</sup> 屎壳郎 志 37山西平陆：官牛 kuan<sup>31</sup>ŋəu<sup>13</sup> 蜗牛 131山西壶关树掌：口牛 maŋ<sup>31</sup> ou<sup>13</sup> 蜗牛 96 ← “牯牛”

## “就”

河南获嘉：就～是他 tsou<sup>13</sup>(去) 研究 90河南洛阳：就～是 tsxu<sup>31</sup>(s<sub>l</sub><sup>0</sup>)，在动词前念 txu<sup>31</sup> 志 72河北获鹿：就是 tou<sup>31</sup> ~ tsiou<sup>31</sup> ʂ<sub>l</sub><sup>0</sup> 184

これらを見ると、kau に該当する例は未見であるが、「ハト」、「キジバト」語形の構成要素の“鳩”が kəu のように現れてもおかしくはないことが分かる。

しかし「キジバト」には“斑鳩”と“鳩”の現れる語形が見られるが、「ハト」の方言語形は漢字表記すれば、“鶉鴒”、“鶉鴒”、“鴒子”といった語形がほとんどを占め、“鶉鴒”のような、漢字表記で“鳩”が現れる語形の報告例は無い<sup>2</sup>。音声面でも pə/pu tɕiəu のような当て字表記による“鳩”相当音節が拗介音を持つ形式で現れるといった例もまた無い。そして“斑鳩キジバト”の“鳩”が拗介音の無い音形になっている例もまた北方方言では全く見られない。陝西、甘肅に以下のような例が見られるが、

## “斑鳩”

陝西凤县：斑鴒 pã<sup>31</sup> ku<sup>24</sup> 斑鴒 589山西大同：斑鴒子 ɸpæ kaʔ<sub>2</sub> tsəʔ<sub>2</sub> 斑鴒 普通 3711内蒙古临河：斑鴒子 ɸpã kɛʔ<sub>2</sub> • tse 斑鴒 普通 3711

2 新語と思われる「イエバト」には“家鴒儿”のように“鳩”の現れる例があるが、それも小論筆者の知る限りでは洛陽の1例のみ。今議論の対象としない。「ハト」に“鳩”の現れる例が無いのに対し、逆に「キジバト」に“姑(姑)/咕(咕)/鴒(鴒)”が現れる例は数多い。「ハト」と「キジバト」の混同は各地で見られるが、それについては後述。

これは第二音節の本字が“鳩”というのではなく、“斑鳩キジバト”と“鶉鴒”、“鶉鴒”が混交を起したと見做すべきだろう。

結局のところ、上掲の“鸽子”諸例の第二音節が何故 *kau*, *kəu* のようになっているのか、現時点では十分に説得力のある解釈を提示し得ない。安徽安慶の“斑鳩キジバト”語形の“鶉勾”の“勾”は“鳩”が本字らしいが、拗介音の有無についてははっきりしないところがあるので、さて置く。*kau* をも含めて全てを統一的に解釈するということができないので、“鸽子”諸例の語形については、一先ず“鳩”が語源である可能性は否定しておきたい。他方、“尸”、“鴟”は中古同音、これらと“屎”は四声相配（平声—上声）の関係にある。こちらについては“鴟”が本字で、“尸”はその通用字、“屎”は後に民間語源で再解釈の結果当てられた字と考えておきたい。「ヤツガシラ」語形を載せる文献の多くは詳しい語釈を付していないので、どういう鳥かよく分からないのだが、後に挙げる山西万榮の「ヤツガシラ」と思われる語形の語釈に“排泄臭気”とある。「臭気を放つ」という特性を持っていることから“屎”という字が用いられたものかも知れないが、逆に先に“尸/鴟鳩（鳩）”若しくは“尸/鴟咕咕”が“屎咕咕”のように解釈されたことから、後に「臭気を放つ」というような辻褃合わせの語釈が附されることになったという可能性もある。

以下は“屎咕咕ヤツガシラ”に似た“斑鳩キジバト”語形及び“布谷鳥”である。

### “斑鳩”

- 河南西峡：水咕咕 斑鳩 597  
 山西阳城：水咕咕 *ɣuei*<sup>312</sup> *ku*<sup>53</sup> *ku*<sup>53</sup> 斑鳩 425  
 山西阳城：水咕咕 *ɣe*<sup>21</sup> *ku*<sup>11</sup> *ku*<sup>11</sup> 斑鳩 研究 136  
 陝西子长：水鴉鴉 *ɣui*<sup>213</sup> *ku*<sup>42</sup> *ku*<sup>0</sup> 斑鳩 765  
 陝西子洲：水故故 *ɣui*<sup>213-21</sup> *ku*<sup>52</sup> *ku*<sup>0</sup> 斑鳩 457  
 陝西绥德：水故故 *ɣui*<sup>213-21</sup> *ku*<sup>51</sup> *ku*<sup>0</sup> 斑鳩（＝子洲、米脂、佳县、榆林、靖边、子长）陝北 140  
 陝西甘泉：水故故 *ɣui*<sup>51</sup> *ku*<sup>44</sup> *ku*<sup>0</sup> 斑鳩（＝安塞、志丹）陝北 140  
 陝西清涧：水故故 *ɣui*<sup>52</sup> *ku*<sup>44</sup> *ku*<sup>0</sup> 斑鳩 陝北 140  
 陝西西安：水故故 *ɣui*<sup>21</sup> *ku*<sup>21</sup> *ku*<sup>53</sup> 斑鳩 陝北 140  
 河南内乡：水姑姑 / *shei*<sup>45</sup> *gu*<sup>0</sup> *gu*<sup>0</sup> / 鸽子  
 河北高邑：十咕啣 鶉鴒 655

### “布谷鳥”

- 山东嶗山：水古堵 *ɣue*<sup>55-434</sup> *ku*<sup>0</sup> *tu*<sup>213</sup> 布谷鳥 870

- 山东掖县：水谷啍 *suei<sup>55</sup> ku<sup>213</sup> tu<sup>0</sup>* 布谷鸟 研究 45/66  
 山东莱州：水谷啍 *suei<sup>55</sup> ku<sup>213</sup> tu<sup>55</sup>* 布谷鸟 120  
 山东青岛：水谷堵 *ʃue<sup>55-44</sup> ku<sup>0</sup> tu<sup>213</sup>* 布谷鸟 SFC90

第二、三音節部分は恐らくその鳴き声に由来するものであろう。但し第一音節が何故“水”であるのか今妥当な解釈が思いつかない。或いは以下のような「キジバト」語形に見られる“山”が関わっているのかも知れない。

### “斑鳩”

- 河北保定：山咕咕 *ɕʃan ɕku • ku* 斑鳩 普通 3711  
 宁夏中卫：山斑鳩 *ʃãi<sup>44</sup> pãi<sup>44</sup> teiou<sup>0</sup>* 106 = “咕咕登鶉鳩”？  
 云南潞西：山鸽子 *sã<sup>44</sup> ko<sup>31</sup> tsɿ<sup>53</sup>* 斑鳩 省志 482  
 云南保山：山鸽子 *ʃã<sup>42</sup> kə<sup>31</sup> tsɿ<sup>53</sup>* 斑鳩 109  
 福建建瓯：山鶉鶉 *suiŋ<sup>54</sup> pa<sup>21</sup> kɔ<sup>24</sup>* 斑鳩 词典 176  
 山东曲阜：山谷谷 *sã<sup>213-13</sup> ku<sup>213-211</sup> tu<sup>0</sup>* 布谷鸟 63

十分な説得力は持たないが、とりあえずは、“山鶉鶉キジバト”、“屎咕咕ヤツガシラ”の混交、それと“山”—“水”の連想が働いて、“水咕咕 / 水姑姑 / 水鶉鶉キジバト”のような語形が成立したものと考えておく。恐らくこの語形は「キツツキ」語形とは直接関係することはないと考えて良からう。

結局のところ、冒頭でも触れたが、四川西昌の“屎嘯嘯キツツキ”は“树铤铤キツツキ”と“屎咕咕ヤツガシラ”の混交によって生まれたもので、同様に「キツツキ」と「ヤツガシラ」のそれぞれの語形の構成要素を半分づつ持つところから、雲南永勝の方は同じ語形で「ヤツガシラ」を指すようになったものだろう。

なお p- で現われる音節の語源はよく分からない。多く重ね型で現われるので、木をつつく音を表す擬声語に由来するものと考えられるべきかも知れない。とりあえずは“铤树槌子”の“铤”（(手斧で) 穴をあける）と同じと看做して (cf. グロータース 岩田訳 p.152)、§ 5.1. “铤啄木(子)”という語形で採ったのと同様の措置を採り、以下、この字を語構成のタイプを漢字で表す場合にも用いることにしたい。つまり、「キツツキ」に現われる“~ pa pa”、“~ pau pau”、“~ paŋ paŋ”、“~ pəŋ pəŋ”などの“p- p-”の重ね型音節を漢字表記で一括して示す場合には“~铤铤”という表記を以て代表させる。この措置は、来源が異なることが明らかになれば、修正を迫られる暫定的かつ便宜的なものである。



## § 6.2. “啄木鸟” ←→ “戴胜 2” ? “布谷鸟” ? “椿象” ?

以下は「キツツキ」が「ヤツガシラ」を意味する“臭咕咕”若しくは「カッコウ/ホトトギス」を意味する“春咕咕”と混同されている例である。なお「カッコウ」は“布谷(鳥)”、“郭公”、「ホトトギス」は“杜鹃”“子規”“杜宇”などの名称があるが、前者を“大杜鹃”、後者を“小杜鹃”と呼んで区別する例があることから分かるように、方言では両者の区別は判然としないことが多い。以下では「カッコウ」を以て両者纏めて扱う。

## “啄木鸟”

山西新绛：臭关关 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>31-51</sup> kuã<sup>53-11</sup> kuã<sup>53-31</sup> 啄木鸟<sup>3</sup> 35

cf. 陕西宁强：抓木鸛 tsua<sup>55</sup> mu<sup>55</sup> kuan<sup>02</sup> 啄木鸟 608

cf. 陕西凤县：抓木鸛 tʂua<sup>214-31</sup> mu<sup>31</sup> kuan<sup>02</sup> 啄木鸟(瓦房坝) 594

## “戴胜 2”

山西万荣：臭鸛鸛 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>33</sup> kuã<sup>0</sup> kuã<sup>0</sup> 一种鸟，比麻雀大，头顶有一撮毛，毛色黑白相间，叫声“咕咕哧”，排泄臭气 词典 250

山西河津：臭鸛鸛 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>44</sup> kuã<sup>0</sup> kuã<sup>0</sup> 研究 172 (語積無し。戴胜?)

山东博兴：臭咕咕 tʂ<sup>h</sup>o<sup>21</sup> ku<sup>53-55</sup> ku<sup>0</sup> 戴胜(陈户镇) 黄河三角洲 168

吉林通化二道江区：臭咕咕 (/ gúgu /) 戴胜 620

黑龙江哈尔滨：臭咕咕 tʂ<sup>h</sup>ou<sup>53</sup> ku<sup>24</sup> ku<sup>0</sup> 戴胜 词典 250

河北滦南：臭咕咕 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>55-53</sup> ku<sup>33</sup> ku<sup>0</sup> 戴胜 819

河北深泽：臭咕咕 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>31</sup> ku<sup>33</sup> ku<sup>0</sup> 571

宁夏银川：臭咕咕 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>13</sup> ku<sup>44</sup> ku<sup>0</sup> 戴胜，一种夏候鸟。嘴细长而弧曲，舌短呈三角形。头顶具有扇形棕色冠羽，体羽斑驳，翅宽圆，尾方形，翅和尾均具黄斑。栖息活动于村庄、田野，性不畏人，食昆虫 词典 206

山西和顺：臭胡胡 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>41</sup> xu<sup>22</sup> xu<sup>22-21</sup> 鸟名，亦名戴胜 61

? 山西平鲁：臭叭咕 ts<sup>h</sup>əu<sup>52</sup> pa<sup>0</sup> ku<sup>0</sup> 研究 152 “戴胜”?

## “布谷鸟”

河北张北：臭八姑 大杜鹃 659

河北尚义：臭鸛鸛 ts<sup>h</sup>əu<sup>24</sup> pa<sup>21</sup> ku<sup>31</sup> 布谷鸟 866

内蒙锡林浩特：臭卜姑 布谷鸟(太仆寺旗) 1841

3 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>31-51</sup>, 原文は tʂəu<sup>31-51</sup> と誤る。

新疆乌鲁木齐：臭包包 tʂ<sup>h</sup>ʁu<sup>44</sup> pɔ<sup>21</sup> pɔ<sup>24</sup> = 布谷鸟？<sup>4</sup> 回民 98

“斑鳩”

甘肃敦煌：臭咕咕 tʂ<sup>h</sup>ou<sup>ɔ</sup> ɔky • ky 斑鳩 普通 3711

“椿象カメムシ”

山西大宁：椿姑姑 tʂ<sup>h</sup>y<sup>31</sup> ku<sup>31</sup> ku<sup>21</sup> 椿树上的虫 研究 166

山东定陶：椿娘娘 tʂ<sup>h</sup>uē<sup>213</sup> nian<sup>52</sup> nian<sup>0</sup> 椿象 148

山东定陶：臭娘娘 tʂ<sup>h</sup>ou<sup>412-41</sup> nian<sup>52</sup> nian<sup>0</sup> 臭大姐 147

河北三河：臭姑娘 椿象 673

云南巧家：臭姑娘 tʂ<sup>h</sup>əu<sup>213</sup> ku<sup>44</sup> niāŋ<sup>31-44</sup> 椿象 94

山西临汾地区：臭蛄蛄 tʂ<sup>h</sup>ou<sup>42</sup> ku<sup>33</sup> p<sup>h</sup>ən<sup>0</sup> 蛄象 临汾方言 182

冒頭、山西万荣、河津の“臭鸛鸛”（“鸛”は普通話では「コウノトリ」）の二例は直ちには“戴胜”かどうか断定できないが、前者の語釈は後の寧夏銀川の「ヤツガシラ」の語釈に似ており、万荣、河津いずれの資料でも他に「ヤツガシラ」の語彙を挙げている訳ではない。一先ずこの2地点の“臭鸛鸛”もまた「ヤツガシラ」語形の一つと考えて良かろう。“鸛”は現代においては「コウノトリ」を意味する。「キツツキ」や「ヤツガシラ」のような小型の鳥にこの字が用いられるのは些か不自然である。但し『広韻』では去声換韻「貫」小韻（古玩切）所属で、「翟雀鳥，鸛上同」とあるから、本来はもっと小さな鳥を言う場合に用いられたものかも知れない。成立がかなり古い時代にまで遡るものなら、この字が用いられていても、特に異とするには及ばない。ところがその声調に着目すると、山西万荣、河津の「ヤツガシラ」意味すると推測される語形の“鸛鸛”部分はいずれも軽声になっている。そして類似した山西新絳の「キツツキ」語形では“关关”と陰平で現れている。こういった点を踏まえると、新絳の“臭关关キツツキ”は“啄木官キツツキ”（“啄树官”、“鹁木官”のような形式は報告例皆無）と“臭咕咕ヤツガシラ”の混交によって成立した可能性もある。つまり“啄木官キツツキ”+“臭咕咕ヤツガシラ”→“臭关关キツツキ（ヤツガシラ？）”→“臭鸛鸛キツツキ/ヤツガシラ”といったような混交である。“关关”→“鸛鸛”

4 “包包鸛”の下に“斑鳩”と共に1字下げて並べており、いずれも語釈は無い。声調調値は異なるが、“包包鸛”は《词典》p.185に見える“包包吃 一种鸟，羽毛大部为棕色，有羽冠，嘴细长而稍弯。吃昆虫，对农业有益”とある語と同じものであろう（IPA省略）。そして新疆焉耆方言の“抱抱嗤 戴胜鸟”《县志》838ともまた同じであろう。つまり“包包鸛”は「ヤツガシラ」と見做して良さそうなのであるが、他方、哈密方言では“包包鸛 布谷鸟”とある（p.137）。指示対象に混乱があるようである。“斑鳩”で「ヤツガシラ」を指すとも思えないので、“包包鸛”、“臭包包”、“斑鳩”は同義語ではなく、恐らくそれぞれ「ヤツガシラ」、「カッコウ」、「キジバト」を指すものであり、後二語を一字下げて示しているのは誤りとすべきだろう。《乌鲁木齐方言词典》には“臭包包”は見えない。

は鳥の名称ということで、類音の鳥名を意味する“鸛”が当て字として用いられたということである。このような当て字においては声調の一致は余り重視されず、最終的にはその語彙に現れる音声形式の方が当て字の字音に一致することについては、本稿(1)の§0. 前言で既に指摘した。

以下の“官”“信”“鸛”を含む「キツツキ」語形を参照されたい。

### “啄木鸟”

河南信阳：啄木官	tsuo <sup>24</sup> mu <sup>24</sup> kuan <sup>24</sup>	啄木鸟	省志 195
陕西岚皋：啄木官	tʂa <sup>31</sup> muo <sup>31</sup> kuan <sup>45</sup>	啄木鸟	529
四川长寿：啄木官儿	ɛtsua ɛmu ɤkuər	啄木鸟	1070
湖北五峰：扎木官	tsua <sup>213</sup> mu <sup>213</sup> kuan <sup>55</sup>	啄木鸟	612
陕西宁强：抓木鸛	tsua <sup>55</sup> mu <sup>55</sup> kuan <sup>02</sup>	啄木鸟	608
陕西凤县：抓木鸛	tʂua <sup>214-31</sup> mu <sup>31</sup> kuan <sup>02</sup>	啄木鸟 (瓦房坝)	594
陕西宁陕：啄木官	tʂua <sup>21</sup> mu <sup>21</sup> kuan <sup>34</sup>	啄木鸟	715
陕西石泉：扎 (/zhuǎ/) 木信		啄木鸟	686

本節で取り上げている“臭鸛鸛”、“臭关关”のような第二、三音節部分が k- 声母でかつ -n 韻尾を持つ重ね型を構成要素に持つ例は筆者の知る限りでは、「キツツキ」、「ヤツガシラ」双方を通じて、上掲の山西新絳、万榮、河津の3例しか見出せない。或いは“臭关关”つまり第二、三音節部分が k- 声母 -n 韻尾にして平声となっている語形で、「ヤツガシラ」を指す語形の例は、他にもどこかで存在しているかもしれない。今のところ、「キツツキ」を“树咕咕”、“臭咕咕”と呼ぶ例は見つかっていない。敦煌の“臭咕咕キジバト”はもしインフォーマント若しくは調査者の誤解でなければ、「ヤツガシラ」語形を「キジバト」語形に転用した、指示対象のズレの例と見做すべきものだろう。

“臭鸛鸛”、“臭关关”に類似した語形を捜しても、“臭咕(子/儿)”、“臭官(子/儿)”といった形式が見当たらないから、これらの形式に、西北、西南方言特有の末尾音節を重ねることによる「指小形式」が適応されたとは考え難い。つまり“臭咕(子/儿)”→“臭咕咕”、“臭官(子/儿)”→“臭官官”といったような形成過程は想定できない。しかしながら“咕咕”の部分は擬声語由来であるにせよ、これの変異体と思しき“鸛鸛”、“关关”はもはや擬声語とは見做し難い。“臭鸛鸛”、“臭关关”のような語形はいずれも西北方言の例である。擬声語とは看做し難いこの重畳形式は、“臭咕(子/儿)”、“臭官(子/儿)”といった語形は存在しないが、西北、西南特有の「指小形式」と同一視されることで存在が許されたものであろう。

“春咕咕”と“臭咕咕”について、それが何を指すか見てみると、“春咕咕”は「カッコウ」を指す語としてのみ用いられ、「ヤツガシラ」を指すのに用いられることはなく、「ヤツガシラ」には専ら“臭咕咕”が用いられている。そして「ヤツガシラ」のこれ以外の“臭～”型語形は上掲例に見るごとく、“臭鸛鸛”、“臭胡胡”しかなく、従って“臭鶉鶉”という語形も無い（山西平魯方言の語釈を欠く例が該当する可能性があるが、定かではないので除外している）。“臭胡胡”は“臭咕咕”が何らかの原因で変化して成立したものだだろう。その原因は不明。これに対し、「カッコウ」には専ら“春咕咕”が用いられ、“臭咕咕”と言う語形は見られない。“春鶉鶉”という語形も報告例が無い。ただ「カッコウ」には、管見の及ぶ範囲内では上に示した如く、“臭～”という語形が3例見られた（河北尚義、張北、内蒙古シリンホト）。但し後続する成分は“姑姑/咕咕”ではなく、“鶉鶉”に由来するものようである。つまりこの3例の「カッコウ」はいずれも“臭鶉鶉”由来と解釈できる。

この状況から見ると、「ヤツガシラ」にはもともと“春咕咕”という方言語形があって、これから“臭咕咕”に変化した（ $t\zeta^h/ts^h u\text{ə}n ku ku \rightarrow * t\zeta^h/ts^h u\text{ə}u ku ku \rightarrow t\zeta^h/ts^h \text{ə}u ku ku$ ）と見ることはできない。先の“臭～”の3例は指示対象の混同がまずあって、“春咕咕”が「カッコウ」を示すようになったということがその成立の前提にあると思われるが、既に指摘したように「カッコウ」に“臭咕咕”と言う語形が見られないということと矛盾する。或いは「ヤツガシラ」を示す“臭咕咕”が“鶉鶉ハト”と混交を生じて、“臭鶉鶉ヤツガシラ”となった後で、指示対象の混乱が起こって、この語が「ヤツガシラ」でも「ハト」でもなく、類音の“春咕咕”であった「カッコウ」との間に混乱を来たし、「カッコウ」を指すようになったということであろうか。

ここで何故“臭”が附されるのかについても、少し検討を加えたい。先に取り上げた“屎咕咕/姑姑”、“屎嘸嘸”のような形式の“屎”がそもそも「ヤツガシラ」の特性（臭い糞をする？）に由来するものであるならば、また“臭”で形容されることがあってもおかしくはない。山西万榮方言の“臭鸛鸛”の語釈に“排泄臭気”とあるのは、正にその特性を記したものであって、名前に“臭”が付く所以を明確に表しているということかも知れないが、既に指摘したように、逆に“臭”が何らかの（特殊な音変化を蒙った）字に対する当て字であって、その当て字の字面に即した民間語源の語釈を文字化した結果であるとも考えられる。ただ、遺憾ながらそれでは本字は何かと問われても、今のところそれらしき候補が見当たらない。

以下、上掲例の末尾に挙げた“椿象カメムシ”語形が関わっている可能性について検討してみる。

## “布谷鸟”

山东兖州：春谷谷 ts<sup>h</sup>uǎ<sup>213-13</sup> ku<sup>312-31</sup> ku<sup>0</sup> 布谷鸟 848

山东历城：春谷谷 布谷鸟 449

山东济阳：春谷儿谷儿 布谷鸟 587

山东曲阜：春谷谷 ts<sup>h</sup>uǎ<sup>213-13</sup> ku<sup>213-211</sup> ku<sup>0</sup> 布谷鸟 63

## “斑鸠”

甘肃敦煌：臭咕咕 tʂ<sup>h</sup>ou<sup>7</sup> ɬky • ky 斑鸠 普通 3711

山东苍山：春咕咕 pf<sup>h</sup>ẽ<sup>213</sup> ku<sup>53-55</sup> ku<sup>0</sup> 斑鸠 173

河北成安：春咕咕 斑鸠 777

“咕咕”は恐らくそもそもはその鳴き声を示す擬声語である。“谷谷”は「カッコウ」が田植え時にやって来て田植えをせかすように鳴くと考えられているところから、穀物の“谷”と関連づけられた結果である。“春咕咕 / 谷谷”は本来「カッコウ」を指すと思われるが、「キジバト」もまたは恐らくその鳴き声から“咕咕 / 姑姑”を構成要素に持つ語形が多く、“春咕咕 / 谷谷”は「キジバト」と結び付けられ易い状況にあったのだろう。

## “斑鸠”

山东新泰：咕咕 ku<sup>42</sup> ku<sup>42</sup> 斑鸠 志 110

河南濮阳：咕咕咕 / gūgūgū / 斑鸠 民俗 242

四川长寿：谷姑姑 ɬku ɬku ʔku 1. 斑鸠 2. 喻说话抓不住要领的人 1070

そこで山東蒼山、河北成安に見られるように、“春咕咕 / 谷谷”が「キジバト」の名称にも転用されることになったと思われる。“春咕咕 / 谷谷”が本来「キジバト」の名称で、それが「カッコウ」に転用されたと、逆の見方もあるが、小論筆者の知る限り、“春咕咕 / 谷谷”で「キジバト」を指すのは極めて稀で、上の山東蒼山、河北成安の2例しか見出していない。「キジバト」の意味の“臭咕咕 / 谷谷”も敦煌の1例のみ。

「カメムシ」は多くの方言（特に北方方言）では“臭大姐”という語形で現れることが多いのだが、先に示したように“椿姑姑”“臭姑娘”のような語形が見られるから、“春咕咕 / 谷谷カッコウ”と“臭姑姑カメムシ”（←“椿姑姑”）の混交が起こったと考える余地がある。但し仔細に検討してみると、“臭姑姑カメムシ”の実例は未見。“椿姑姑”も1例しか見出していないので、“椿姑姑”→“臭姑姑”のような変化は想定し難く、なお説得力には乏しい。“臭咕咕”は多

く「ヤツガシラ」を意味し、「ヤツガシラ」語形には“屎咕咕”、“臭咕咕”はあるが、“春咕咕”、“椿咕咕”のような例は存在しない。また「カメムシ」語形には“臭咕咕”の報告例が見当たらないから、「カメムシ」語形との混交で「ヤツガシラ」が“臭咕咕”となったとは考え難い。とりあえずは“臭咕咕”は本来「ヤツガシラ」を意味する語で、敦煌の例はそれが「キジバト」に転用されたものと見るべきだろう。結局、「ヤツガシラ」語形に現れる“臭”については、やはりとりあえずのところ、その特性を示すものとしておく。本字が別にあるという見方をする十分な論拠は見出せない。

以下は「ヤツガシラ」と「ハト」の合体と思しき例である。

### “啄木鸟”

陝西延長：丑卜古 tɕ<sup>h</sup>əu<sup>52</sup> pə<sup>35</sup> ku<sup>0</sup> 啄木鸟 598 (= 陝北 140)

### “布谷鸟”

内蒙锡林浩特：臭卜姑 布谷鸟 (太仆寺旗) 1841

内蒙锡林浩特：臭卜姑 布谷鸟 (太仆寺旗) 1841

河北尚义：臭鸺咕 tɕ<sup>h</sup>əu<sup>24</sup> pa<sup>21</sup> ku<sup>31</sup> 布谷鸟 866

河北张北：臭八姑 大杜鹃 659

河北尚义：臭鸺咕 tɕ<sup>h</sup>əu<sup>24</sup> pa<sup>21</sup> ku<sup>31</sup> 布谷鸟 866

河北张北：臭八姑 大杜鹃 659

第一音節の声調の違いが気になるころではあるが、当て字の使用では声調の一致は余り重要ではない。恐らく“臭咕咕ヤツガシラ”と“鸺咕ハト”の混交語形“臭鸺咕”が「カッコウ」を指すようになり、陝西延長ではそれが「キツツキ」を指すことになったということだろう。河北方言の例はいずれも第二、三音節が pa<sup>?</sup> ku のようになっているから、或いは“八哥”も関わっているかも知れない。関係ありそうな音形の“八哥”の例を以下に挙げる。

### “八哥”

山东博山：八哥 pa<sup>214-22</sup> kuə<sup>0-33</sup> 研究 124

山东烟台：八哥 pa<sup>214-35</sup> kuə<sup>31</sup> 85

山西运城：八哥 pa<sup>31</sup> kuə<sup>0</sup> 38

山西永济：八哥儿 pa<sup>21</sup> kuər<sup>0</sup> 36、县志 485

山西山阴：八哥儿 pa<sup>24</sup> kuər<sup>313</sup> 32

山西朔州朔城：八哥儿 pa<sup>235</sup> kuər<sup>312</sup> 157

以下の例は“鵲鑿鑿”と“鵲鵲”の混交によって生じた語形であろう。

“啄木鸟”

- 河北涉县：鵲巴果  $te^{hiæ^{31-33}} pa^0 kuo^{53}$  啄木鸟 7  
 山西长治：鵲剥骨  $te^{hiæ} pa^? kuə^?$  啄木鸟 普通 3713  
 山西孝义：鵲剥蛄  $te^{hiæ} pa^?^{2-53} ku^{11}$  啄木鸟 86  
 cf. 河北井陘：鵲拔木 啄木鸟 640  
 山西介休：□树脖蛄  $te^{hiæ^{13-11}} su^{45} p\lambda^?^{423-53} ku^{13-0}$  啄木鸟 42  
 山西平遥：嵌树剥蛄  $te^{hiæ}^{13-31} su^{35} p\lambda^?^{423-54} ku^{13-31}$  啄木鸟 民俗 71  
 山西沁源：鵲树八姑子 啄木鸟 472<sup>5</sup>  
 山西灵石：鵲树鵲鵲  $te^{hiæ^{214}} su^{53} pa^?^{33} ku^{214} ku^{214}$  啄木鸟 605  
 山西沁县：秋树□钩蛄  $te^{hiæu}^{213-21} su^{55} pə^?^4 kəu^{213-42} kəu^{213}$  啄木鸟 27

- 河南沁阳：鵲把把  $te^{hian^{33}} pa^{53} pa^0$  啄木鸟 省志 195  
 山西晋城：千巴巴  $te^{hiæ^{33}} pa^{33} pa^{33}$  啄木鸟 38  
 山西垣曲：钳巴巴  $te^{hiæ^{31}} pa^0 pa^0$  啄木鸟 县志 623  
 山西乡宁：纤叭叭  $te^{hiæ^{53}} pa^{20} pa^{20}$  啄木鸟 674  
 山西吉县：鵲叭叭  $te^{hiæ}^{423-42} pa^{423-42} pa^0$  啄木鸟 37  
 山西新绛：□巴巴  $te^{hiæ}^{53-55} pa^{53-11} pa^{53-31}$  啄木鸟 35  
 山西浮山：田巴巴  $t^{hiæ}^{13-31} pa^{33} pa^0$  啄木鸟 202  
 河南灵宝：鵲梆梆  $te^{hian^{52}} pa\eta^{52} pa\eta^0$  啄木鸟 省志 195  
 陕西华阴：鵲梆梆  $te^{hiæ}^{31-42} pa\eta^{31} pa\eta^{02}$  啄木鸟 755  
 山西平陆：千邦邦  $te^{hian^{31}} pa\eta^{33} pa\eta^{33}$  啄木鸟 研究 131; “邦”  $pa\eta^{31}$ (阴平) 98<sup>6</sup>  
 山西平陆：千邦邦  $te^{hian^{31}} pa\eta^{33} pa\eta^0$  啄木鸟 方言志 40; “邦”  $pa\eta^{31}$ (阴平) 31<sup>7</sup>

- 陕西延安：鵲树鑿鑿  $te^{hiæ}^{314-31} \eta^{44} pə\eta^{314-31} pə\eta^{314-43}$  啄木鸟 陕西词汇 285  
 陕西子洲：鵲树鑿鑿  $te^{hiæ}^{213-21} \eta^{52} pə\eta^{33} pə\eta^0$  啄木鸟 457  
 陕西绥德：鵲树鑿鑿  $te^{hiæ}^{213} \eta^{52} pə\eta^{213} pə\eta^0$  啄木鸟 研究 58  
 陕西绥德：鵲树奔奔  $te^{hiæ}^{213-21} \eta^{51} pə\eta^{213-24} pə\eta^0$  啄木鸟 陕北 140  
 山西中阳：鵲树奔奔  $te^{hiæ}^{24} \eta^{53} pə\eta^{24} pə\eta^0$  啄木鸟 72  
 山西石楼：鵲树钵钵  $te^{hiæ\eta}^{413} su^{52} pə\eta^{44} pə\eta^{44}$  啄木鸟 469<sup>8</sup>

5 “鵲”原文では“樽”に誤る。

6  $pa\eta^{33}$ 、33 は单字音去声調値。

7  $pa\eta^{33}$ 、33 は单字音去声調値。

8  $te^{hiæ\eta}^{413}$ 、原文  $h$  無し。今補う。

山西永和：唵树铤铤  $te^{h}i\dot{a}^{312} \text{ \textsubscript{su}^{53} p\ddot{a}\eta^{33} p\ddot{a}\eta^0$  一种鸟（打石腰） 研究 135<sup>9</sup>  
“鸽子”

山西永济：蒲鸽  $p^h u^{24} kuo^0$  鸽子 36  $pu\ddot{a} k\ddot{a} \rightarrow pu\ddot{a} ku\ddot{a} \rightarrow pu ku\ddot{a}$

陕西商县：鸚鸽  $p^h u^{21} kuo^{53}$  64  $\longleftrightarrow$  布谷  $pu^{55} ku^{21}$  64

冒頭の涉県、長治、孝義の例は恐らく“鵠铤铤”語形の内の“鵠把把 / 巴巴 / 叭叭”のような漢字表記のもの、音声表記すれば、 $te^{h}ian pa pa$  のような「キツツキ」と“鸚鵡ハト”の混交によって生じたと考えられる。或いは“鸚鵡ハト”ではなく“鸚鵡ハト”との混交であるならば、 $te^{h}ian p(u)\ddot{a} k\ddot{a}$  といった形式が期待されるところであるが、 $te^{h}ian pa ku\ddot{a}$  と第二、三音節の韻母が、「ハト」とは一致していないから、これらの例もまた先の例同様、“八哥”も関わって形成された可能性がある。介休、平遥、沁源、靈石の例は、“鵠树铤铤”と“鸚鵡”の混交によるものであろう。沁県の“秋树口钩钩”もその一異型と思われるが、ならば何故“鵠”が“秋”のような音形になったのか、その理由は不明である。“臭关关”のような「キツツキ」語形との混交によるものなら、先の陝西延長の、“丑ト古”の、“丑”とともに“鵠”と“臭”の中間形態を示すものと見なすべきなのかも知れない。現在のところ、他に類例は無い。

### § 6.3. “臭关关 / 鸚鸚”の第二、三音節韻母についての補足

“臭关关 / 鸚鸚”の韻母が何故このようになっているのかについては、「キツツキ」でも“啄木官”という語形が見られるので、それへの類推が働いた結果と見ることが妥当であろう。これについては既に指摘した通りである。

動物名称は擬人化されることが間々あり、「キツツキ」語形の“～官”もその一例と言えよう。類例に「トンボ」の例がある。

#### “蜻蜓”

甘肃兰州：苍官  $ts^h\ddot{a} ku\ddot{e}$  蜻蜓 普通 3752

甘肃兰州：春官  $pf^h\ddot{a}n^{53} kuan^1$  蜻蜓 市志 198

甘肃皋兰：水官官  $fei^{44} ku\ddot{e}n^{31} ku\ddot{e}n^{21}$  蜻蜓 830

山西原平：河灌灌  $x\gamma^{33} ku\ddot{e}^{53} ku\ddot{e}^{53-21}$  蜻蜓 74

山东齐河：蜓蜓官儿  $t^h i\eta^{213} t^h i\eta^0 kuanr^{213}$  蜻蜓 715

cf. 山东寿光：官蜓  $ku\ddot{a}^{213-55} t^h i\eta^{213}$  蜻蜓 131

cf. 山东平邑：光光蜓  $kuan\eta^{213-22} kuan\eta^0 t^h i\eta^{213}$  蜻蜓 87

9  $te^{h}i\dot{a}^{312}$ 、原文  $^h$  無し。今補う。



上掲例中の甘肅方言の“～官(官)”という構成の「トンボ」語形は他の地域では見られないものである。甘肅阜蘭方言は西北、西南方言で見られる重畳による「小称」が加わっている。管見の及ぶ限りで、「トンボ」を意味する方言語彙に“春官官”、“蒼官官”、“臭官官”といったような形式は見られない。このような「トンボ」語形の分布は極めて限定的であり、山西とはやや離れているので、先の山西新絳の「キツツキ」語形“臭关关”の成立に關与したかどうか何とも言えない。但しこの甘肅方言の「トンボ」語形は直接“臭关关/鸛鸛”の成立に關与したのではないにしても、同じく～kuan (kuan) という音形であるから、類推がより容易に働き易くなるというような、いわば触媒のような作用を果たした可能性は無いではない。

「キツツキ」語形には“～官”の他に、以下のような擬人化の例も見られる。

### “啄木鸟”

湖南娄底：啄木公 tsua<sup>35</sup> mo<sup>35</sup> kɿŋ<sup>0</sup> 啄木鸟 研究 144

湖南娄底：□木公 tsua<sup>35</sup> mo<sup>35-55</sup> kɿŋ<sup>0</sup> 啄木鸟 词典 61

cf. □ tsua<sup>35</sup> ①啄(食)②叩击 词典 61

湖南沅陵：啄木公 ts<sup>h</sup>ua<sup>13</sup> moʔ<sup>53</sup> kəw<sup>55</sup> 啄木鸟 研究 129

江苏靖江：锻木公公 tū<sup>52</sup> məʔ<sup>23</sup> koŋ<sup>44</sup> koŋ<sup>44-31</sup> 啄木鸟 词典 299

广东雷州：凿树公 ts<sup>h</sup>ak<sup>1</sup> ts<sup>h</sup>iu<sup>24-33</sup> koŋ<sup>24</sup> 啄木鸟 词典 308

湖北浠水：啄木姑儿 tʂo<sub>3</sub> mu<sub>3</sub> kur 啄木鸟 170

湖北安陆：锻磨佬 tan<sup>35</sup> mo<sup>55</sup> nau<sup>52</sup> 啄木鸟 FY94-4/311←“啄木佬”/“啄木鸟”？  
佬 nau<sup>52</sup>—鸟

山东荣成：打木匠 ta<sup>213</sup> m<sup>0</sup> tsiã<sup>22</sup> 啄木鸟 张卫东 97

山东文登：打木匠儿 ta<sup>213</sup> mu<sup>0</sup> tsiaŋr<sup>33</sup> 啄木鸟 909

山东莱州：瞎木匠 eia<sup>55</sup> mu<sup>42</sup> tsiaŋ<sup>0</sup> 啄木鸟 121

安徽太平：排工匠 tsã<sup>32</sup> koŋ<sup>32</sup> zi<sup>5</sup><sup>24</sup> 啄木鸟 省志 355←“啄木官”+“工匠”

cf. 河北鸡泽：端木鸠儿 啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118

河北武强：啣打母 啄木鸟 672<sup>10</sup>

河北武强：啣打母子 啄木鸟 672<sup>11</sup>

10 “啣”は普通話では pèn, bēn の 2 音有り。ここでは後者の音を意図しているのであろう。

11 上に同じ。

河北深县：奔打母儿 pən<sup>33</sup> ta<sup>0</sup> mur<sup>213</sup> 啄木鸟 538

河北肃宁：铨嘯母子 pən<sup>22</sup> tə<sup>0</sup> mu<sup>214-21</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 162

湖北安陸の語源は恐らく“啄木鸟”である。以下のような変化を辿ったものだろう。

tau<sup>k</sup> mō<sup>k</sup> teu→tua<sup>?</sup> mo<sup>?</sup> niau→tuam mo niau→tuam mo nau

この方言は n-/l- を区別しないので、“鸟”が擬人化で niau→“佬” nau となったものと思われる。

最初の湖南、広東の例に見られる“～公”と湖北浠水の“～姑”は“～官”と共にいずれも k- 声母であるから、これらは同源なのかも知れない。ただ、そうであればそれが何であるか。今のところ確たる私案は無い。報告例からすると、“～官”は量的に他の二者を圧倒しているから、“～公”、“～姑”は“～官”に由来するとすべきかも知れない。

#### § 6.4. “啄木鸟” ←→ “戴胜 3”

以下の最初の2例は「キツツキ」ではなく、「ヤツガシラ」である。これらは“臭咕咕”の“臭”を類義語の“臊”に取り換えたものか？ その次の甘肅方言の2例も同様であろう。寧夏中衛方言に見える“騷呱呱”が“春咕咕”もしくは“臭咕咕”と混交して生じた可能性無きにしてもあらずだが、この字面で表記される語形は他に報告例を見ない。語釈も具体的に何を指すのかも不明。「ヤツガシラ」のことなのかも知れないが、孤例につき考慮の対象から除外する。恐らく、その基になったのは、“臭咕咕”ではあるまい。可能性のあるものとして新疆ウルムチ方言に見える“臭包包”がある。但しこの形式もまた管見の及ぶ限りでは孤例であり、些か説得力に乏しい。さはさりながら、有力な推定成立過程が考案できないので、とりあえずは、一つの可能性として、“鶻包包”と“臭咕咕”の混交で“臭包包”が生まれ、“臭”を同義語の“臊”に取り換えることで、“臊包包”が生まれ、更に既存の鳥名と関連付けられることによって“臊鶻鶻”となった、という試案を提示しておきたい。

この甘肅方言の2例に現われる“鶻鶻”の音声はともに不明。以下の挙例中の陝西隴県には pau pau とある。甘肅方言の当該例も概ね pau pau, pau pau, pɔ pɔ のようなものであろうと推測されるが、実際の音声とズレた類音表記である可能性も否定できない。たとえば実際には pa pa であるのに、鳥の名であるからと類音の“鶻鶻”を当てたということかも知れない。そうであれば再検討の必要が生じる。

## “啄木鸟”

甘肃崇信：臊鸚鸚 啄木鸟 609

## “戴胜”

甘肃平凉：臊鸚鸚 戴胜鸟 711

河南温县：臊姑姑 戴胜 645

宁夏中卫：臊咕咕 səu<sup>44</sup> ku<sup>44</sup> ku<sup>0</sup> 即胜冠，也叫戴胜鸟 106cf. 宁夏中宁：骚呱呱 sə<sup>44</sup> kua<sup>13-11</sup> kua<sup>0</sup> 臭斑鸠 93cf. 宁夏银川：骚呱呱 sə<sup>44</sup> kua<sup>13</sup> kua<sup>0</sup> 臭斑鸠 方言志 95

## “啄木鸟”

河北深泽：臭奔打木 tɕ<sup>h</sup>əu<sup>31</sup> pən<sup>33</sup> ta<sup>33</sup> mu<sup>33</sup> 啄木鸟 571<sup>12</sup>

河北容县：臭铙打 啄木鸟 501

## “布谷鸟”？

新疆乌鲁木齐：臭包包 tɕ<sup>h</sup>u<sup>44</sup> pɔ<sup>21</sup> pɔ<sup>24</sup> = 斑鸠？ 回民 98<sup>13</sup>

## “啄木鸟”

河南灵宝：鸪宝宝 啄木鸟 859

山西临猗：鸪报报 te<sup>h</sup>iä<sup>31</sup> pau<sup>33</sup> pau<sup>20</sup> 啄木鸟 638陕西户县：鸪报报 te<sup>h</sup>iä<sup>31</sup> pau<sup>31</sup> pau<sup>35-31</sup> 啄木鸟 287河南灵宝：鸪报报 ɛte<sup>h</sup>ian pau<sup>ɿ</sup> pau 啄木鸟 普通 3713陕西西安：鸪报报 ɛte<sup>h</sup>iä pɔ<sup>ɿ</sup> pɔ 啄木鸟 普通 3713甘肃张家川：鸪报报 ts<sup>h</sup>æ<sup>213</sup> pao<sup>44</sup> pau<sup>44</sup> 啄木鸟 1413

陕西宝鸡：鸪刨刨 啄木鸟 1027

山西永济：鸪刨刨 te<sup>h</sup>iä<sup>21</sup> pau<sup>0</sup> pau<sup>0</sup> 啄木鸟 36山西万荣：鸪刨刨 tɕ<sup>h</sup>iä<sup>51</sup> pau<sup>24</sup> pau<sup>33</sup> 啄木鸟 词典 280山西河津：鸪曝曝 tɕ<sup>h</sup>an<sup>31</sup> pɕ<sup>44</sup> pɕ<sup>0</sup> 啄木鸟 研究 192陕西岐山：鸪曝曝 ɛte<sup>h</sup>iä pɔ<sup>ɿ</sup> ɛpɔ 啄木鸟 689陕西兴平：鸪包包 te<sup>h</sup>iä<sup>31</sup> pau<sup>31</sup> pau<sup>02</sup> 啄木鸟；枸杞子 359陕西合阳：鸪包包 / qian<sup>31</sup> bao<sup>35</sup> bao<sup>35</sup> / ①啄木鸟②口惠而实不至的人 803

陕西韩城：鸪包包 / ɛqiang ɛbao bao / 啄木鸟 931

陕西扶风：鸪暴暴 te<sup>h</sup>iä<sup>31</sup> pau<sup>44</sup> pau<sup>44</sup> 啄木鸟 623 (= 陕西鳞游 583)陕西千阳：鸪爆爆 teiä<sup>21</sup> pau<sup>44</sup> pau<sup>44</sup> 啄木鸟 359陕西陇县：鸪鸚鸚 teiä<sup>31</sup> pau<sup>44</sup> pau<sup>44</sup> 啄木鸟 949

12 角川大辞典には“臭啖打木 chòubēndāmù コアカゲラ”とある (p.440)。

13 注4参照。

- 山西临汾屯里：鵠鵠鵠 t<sup>h</sup>iai<sup>22</sup> pɔ<sup>22</sup> pɔ<sup>22</sup> 啄木鸟 14  
 河南沁阳：鵠巴巴 te<sup>h</sup>ian<sup>33</sup> pa<sup>53</sup> pa<sup>0</sup> 啄木鸟 省志 195  
 山西曲沃：鵠巴巴 啄木鸟 469  
 河南长葛：千巴巴 / cian<sup>24</sup> ba<sup>24</sup> ba<sup>24</sup> / 啄木鸟 624  
 山西晋城：千巴巴 te<sup>h</sup>iɛ<sup>33</sup> pa<sup>33</sup> pa<sup>33</sup> 啄木鸟 38  
 山西垣曲：钳巴巴 te<sup>h</sup>iã<sup>31</sup> pa<sup>0</sup> pa<sup>0</sup> 啄木鸟 县志 623  
 山西乡宁：纤叭叭 te<sup>h</sup>iã<sup>53</sup> pa<sup>20</sup> pa<sup>20</sup> 啄木鸟 674  
 山西安邑：嗛剥剥 读为千巴巴，啄木鸟也，食枯木之虫，其声剥剥 47  
 山西吉县：鵠叭叭 te<sup>h</sup>iiã<sup>423-42</sup> pa<sup>423-42</sup> pa<sup>0</sup> 啄木鸟 37  
 山西新绛：□巴巴 te<sup>h</sup>iã<sup>53-55</sup> pa<sup>53-11</sup> pa<sup>53-31</sup> 啄木鸟 35

“巴巴”で「大便（幼児語。多くは名詞として）」を言う方言は少なくない。これと“臭”は容易に関連付けられる。ならば、「キツツキ」を現わす語に、漢字表記で示せば“臭巴巴”というような語形があっても良さそうなのに、該当例が皆無である。「臭いウンチ」では口にするのも憚られると、忌避の意図が働いたのかも知れない。しかしそうであるにせよ、漢字の字面だけ変えたような語が存在して然るべきである。“鵠巴巴”という語形が見られるのに“臭巴巴”という語形の報告例は無いということに対して何らかの説明が必要となってくる。また“鵠巴巴”と“臭咕咕”の混交で“臭巴巴”が生じて、これが鳥の名称の“鵠”と関連付けられて“鵠鵠”となったというような想定も、“臭巴巴”の報告例が無いので説得力に欠ける。

- 山东济南：疸疸 pa<sup>45</sup> pa<sup>0</sup> 用于对幼儿说屎，粪便或脏物的称呼 市志 145  
 山东沂水：巴巴 pa<sup>44-213</sup> pa<sup>0</sup> 大便（儿语） 91  
 河北灵寿：疸疸 pa<sup>55</sup> pa<sup>0</sup> 屎 700  
 河北乐亭：巴巴 pa<sup>7</sup> pa 大便，屎 674  
 河北青龙：把把 人的粪便 943  
 天津大港：拉疸疸 la<sup>24</sup> pa<sup>55-24</sup> pa<sup>20</sup> 拉屎 890  
 河南永城：屙粑粑 ɣ<sup>31</sup> pa<sup>55</sup> pa<sup>0</sup> 儿童大便 566  
 陕西子洲：疸屎 pa<sup>213-24</sup> sɿ<sup>213</sup> 大便 459  
 陕西宜川：巴 大便 912  
 湖北通城：把把 pa<sup>31</sup> pa<sup>31</sup> 大便 159

以下の例は先の例に似ているが、語形のやや異なるものである。これらの語源をどう解釈すべきか今適当な私案は無い。“凿打木子”、“啄打木子”、“凿啄

木子”、“啄啄木子”等、第二音節の“打”、“大”で表記される字音についても、§ 1.1. では説明の便宜上“啄”を本字と仮定した上で検討を加えたが、現実には全て“啄”に由来すると考えるのは危険である。この第一音節については、一つに、本字が“凿”（従母字）で、これが  $dsauk > tsau? > tsau \rightarrow sau$  のような特殊変化を遂げたと思倣す解釈があるが、やや難がある。もう一つに語源が“啄”で、同様に  $tauk > t\dot{s}au? > tsau \rightarrow sau$  のような特殊変化を遂げたとする見方がある。両方に共通する  $tsau \rightarrow sau$  の変化は声母の弱化と看倣すべきか？ 無気閉鎖音、破擦音が弱化して同じ調音点の摩擦音になるという例は先ず見かけないから、もしこの変化が実際に起こったとすれば、paradigmatic な要因によるものと考えるべきであろう。語源が“凿啄木子”であれば、第二音節はそり舌音化せずに  $t$ -を保っていると考えられることになる。当て字が成されることで、 $t$ -がよく保たれたということも考えられる。“啄啄木子”であれば、恐らく異なる二つの方言語形が融合することで、第一音節と第二音節で異なる層の声母の反映が現われることになり、一語中に異なる層の反映が同居することになったということになろう。その類例として、上海語の“日本人  $zə? pəŋ ŋiŋ$ ”を挙げておく。異なる方言層に属する“日”、“人”の字音が一語に同居している。

### “啄木鸟”

山东临淄：臊打抹子  $sɔ^{213-31} ta^0 mə^0 tsɿ^0$  啄木鸟 564

山东淄博：鶻（骚）打木（榔）子  $ts^h a^{213-31} (sɔ^{213-31}) ta^0 mu^0 (paŋ^0) tsɿ^0$   
啄木鸟 2260

山东潍坊：骚打毛子  $sɔ^{213-31} ta^0 mɔ^{53-24} tsɿ^0$  啄木鸟（寒亭区） 740

山东潍坊：骚大口子 啄木鸟（寒亭区杨家阜村） 377

山东临朐：□打□子  $θɔ^{21} ta^0 mə^{55-213} tθɿ^0$  啄木鸟 37

山东临朐：□打□子  $θɔ^{21} ta^0 mo^{55-213} tθɿ^0$  啄木鸟 687

山东青州：索打模子  $sɔ^{214-21} ta^0 mo^{44-214} tsɿ^0$  啄木鸟 山东方言词典 90

山东青州：扫啄木子  $sɔ^{214} ta^0 mo^{44} tsɿ^0$  啄木鸟 950

### § 6.5. “啄木鸟” ↔ “鹈鹕”

“点水雀”は普通、「セキレイ」を意味する語で、四川、雲南に多く報告例が見られる。雲南昭通の一地点で「キツツキ」として報告されているが、転用例というより、誤認の可能性が高い。所拠文献は《普通话基础方言基本词汇集》。もし間違いでなければ、「セキレイ」が尾羽を上下に振る様が、「キツツキ」の木をつつく動作を連想させるということで、指示対象の混乱が生じたものか。

## “啄木鸟”

云南昭通：点水雀 ˩tian ˩suei ˩te<sup>h</sup>io 啄木鸟 普通 3713 ←→ “鹊鸂”

## “鹊鸂”

四川成都：点水雀儿 tiɛn<sup>53</sup> suei<sup>53</sup> te<sup>h</sup>yɔ<sup>21</sup> ①喜在水上飞，常用嘴点泼水面的小鸟 ② [略] 词典 281

贵州贵阳：点水雀 tian<sup>53</sup> suei<sup>53</sup> te<sup>h</sup>io<sup>31</sup> 一种小鸟 词典 220

云南永胜：点水雀 tiɛn<sup>42</sup> suei<sup>42</sup> te<sup>h</sup>io<sup>31</sup> 鹊鸂 110

云南维西：点水雀 tiɛn<sup>53</sup> ɣuei<sup>53</sup> te<sup>h</sup>io<sup>31</sup> 白鹊鸂 129

云南威信：点水雀叫 tiɛn<sup>53</sup> ɣuei<sup>53</sup> te<sup>h</sup>io<sup>214</sup> ɔ<sup>4</sup> 常在水边溅水的小鸟 177

もし、「キツツキ」の語形と「セキレイ」との間に混交が起こるものならば、音声的に「キツツキ」に“点树雀”、“点木雀”のような漢字表記が可能な類似形式が存在することが予想されるが、管見の及ぶ限りで、そのような語形は見当たらない。これ以外の混交を生じそうな形式を探しても、以下のような例しか見つからない。

河北广平：端树虫 啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118

河北魏县：端树精 啄木鸟 河北词汇 118

河北鸡泽：端木鸠儿 啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118

山东郟城：断磨虫 tuæ<sup>41-43</sup> mɔ<sup>41</sup> tɕ<sup>h</sup>uŋ<sup>55</sup> 啄木鸟 86、临沂 209 ← “啄木虫”

山东临沂：煨磨虫 tuã<sup>312-31</sup> mɔ<sup>0</sup> tɕ<sup>h</sup>uŋ<sup>53</sup> 啄木鸟 山东方言词典 90 ← “啄木虫”

甘肃天水：啄木虫 ɬuən ɬmu ɬts<sup>h</sup>uən 啄木鸟 普通 3713

河北鸡泽：端木鸠儿 啄木鸟 (=河北肥乡) 河北词汇 118

河北鸡泽：端木丘的 啄木鸟 721 ← “啄木虫子”

重庆：蝌蚪雀儿 ɬk<sup>h</sup>o ɬk<sup>h</sup>o ɬte<sup>h</sup>yɔ<sup>r</sup> 啄木鸟 普通 3713 ← “磕磕雀儿”？

混交については考慮するに及ばないようである。これらの例の第一音節は恐らく、“啄”が後続する“木”の影響で、陽韻尾化したものであろう。§ 3.6. 参照。

## § 6.6. “啄木鸟” ←→ “鹊鸂”？“鸂”？“画眉”？“山雀”？

“鹊鸂セキレイ”（及び“鸂ウグイス”等）との間での混同と思われるもう一つのタイプが以下の例である。該当語形の積義は必ずしも同じではなく、“画眉ガビチョウ”、“山雀シジュウカラ”を指している場合もある。とりあえず“鹊鸂”等として一括して挙げている。

最初に挙げた山東費県の“唧唧棍子”は、「セキレイ」等を意味する“鶺鴒鶺鴒”が「キツツキ」に転用されたものかと考えられる。

### “啄木鸟”

山东费县：唧唧棍子  $tei^{213-21} tei^0 ku\tilde{e}^{31-53} t\theta_1^0$  啄木鸟 临沂方言志 209  
← “鶺鴒官”？

### “鶺鴒”等

山东平度：鶺鴒鶺鴒儿  $tsi^{55-214} tsi^0 konr^{55}$  鶺鴒，一说鶺鴒 156  
山东枣庄：叽叽棍儿  $tei^{213} tei^0 kuer^{51}$  形体很小，羽毛灰色、善于鸣叫的小鸟。  
行踪不定，不易被发现 山东词典 91  
山东莱州：叽叽庚儿  $tsi^{213} tsi^0 k\tilde{a}r^{55}$  一种身体瘦小，常发出“叽叽”鸣声的鸟  
120  
山东威海：唧唧嘎  $tsi^{53} tsi^0 ka^{312}$  画眉鸟 山东词典 91  
山东博兴：叽叽罐儿  $tsi^{44-213} tsi^0 kuer^{21}$  灰山雀 黄河三角洲 168  
山东滨州：叽叽鶺 小山雀 704  
山东成武：叽叽奎儿 山雀 679

“唧唧 / 叽叽”及び“鶺鴒”はいずれも“叽叽”同様、その鳴き声に由来する擬声語であろう。もし山東費県の“唧唧棍子”が正しく「キツツキ」を指すのであれば、“唧唧 / 叽叽 / 叽叽”と“鶺鴒官”の“鶺鴒”、「セキレイ」等の第三音節の“棍儿 / 鶺儿 / 庚儿 / 嘎 / 罐 (儿) / ”、“奎儿”と“鶺鴒官”の第三音節の“官”が音声的類似があるところから、このような混同が起こったものかと考えられるが、“鶺鴒官キツツキ”の報告例は管見の及ぶ限りでは皆無。「キツツキ」語形で“鶺鴒～”となっているのは以下のような語形である。

### “啄木鸟”

陕西高陵：鶺鴒棒  $te^h i\tilde{a}^{31-51} te^h i\tilde{a}^{31} paŋ^{55}$  啄木鸟 694  
陕西高陵：鶺鴒鸨  $te^h i\tilde{a}^{31-51} te^h i\tilde{a}^{31} pau^{55}$  啄木鸟 694  
陕西三原：鶺鴒抱 /  $qian^{31} qian^{31} bao^{55} /$  啄木鸟 989  
河北秦皇岛：鶺鴒木  $te^h i\tilde{a}n^{55} te^h i\tilde{a}n^{55} mu^{51}$  啄木鸟 117  
河北青龙：鶺鴒木 啄木鸟 (=成安、内丘) 河北词汇 118  
山东临清：鶺鴒木  $te^h i\tilde{e}^{323-44} te^h i\tilde{e}^0 mu^{323}$  啄木鸟 102  
河南开封：鶺鴒木  $te^h i\tilde{a}n^{24} te^h i\tilde{a}n^0 mu^{24}$  啄木鸟 (=商丘、周口) 省志 195  
河南周口地区：鶺鴒木 (子)  $te^h i\tilde{a}n te^h i\tilde{a}n \text{ } \mu (ts_1)$  啄木鸟 897  
河南柘城：扞扞木 啄木鸟 484

- 河南鄆城：千千木 te<sup>h</sup>ian<sup>24</sup> te<sup>h</sup>ian<sup>0</sup> mu<sup>24</sup> 啄木鸟 657  
 河南太康：千千木 / qian<sup>24</sup> qian<sup>24</sup> mu<sup>24</sup> / 啄木鸟 591  
 河南开封：千千木儿 te<sup>h</sup>ian<sup>24</sup> te<sup>h</sup>ian<sup>24</sup> mur<sup>24</sup> 啄木鸟 县志 541  
 山东金乡：千千木子 te<sup>h</sup>iã<sup>213-21</sup> te<sup>h</sup>iã<sup>0</sup> mu<sup>213-21</sup> tsɿ<sup>0</sup> 啄木鸟 116  
 河北青龙：鶺鴒木 te<sup>h</sup>ian<sup>55</sup> te<sup>h</sup>ian<sup>55</sup> mu<sup>51</sup> 啄木鸟 945 (=天津宝坻 818)  
 河北抚宁：鶺鴒儿木 啄木鸟 571  
 山东鲁西：天仙目 / tiān hiān mù / 啄木鸟 FPJ3/44 (不举具体地名)

“鶺鴒～”の形式は、管見の及ぶ限りでは“鶺鴒棒”（“鶺鴒鸚”、“鶺鴒抱”も同類），“鶺鴒木”しか無い。“鶺鴒棒”のような中間形態の報告例は見られないから、混交については考慮するまでもないだろう。先に指摘したように、費県の例はやはり指示対象の混同で、「セキレイ」語形が「キツツキ」に転用されたと見るべきだろう。

### § 6.7. “啄木鸟” ←→ “黄莺”？“蜻蜓”？

次の例も他に全く類例が見当たらないから、誤認の可能性が高いが、本来指すものが「キツツキ」でなければ、一体何を指していたものかよく分からない。所拠文献は《普通话基础方言基本词汇集》。「ウグイス」の“敲丁丁”にしても、所拠文献には音声記号が無く、今のところやはり類例が見つからない。

#### “啄木鸟”

云南昭通：蒿丁丁 ɬxaŋ ɬtin ɬtin 啄木鸟 普通 3713

#### “黄莺”

四川会理：敲丁丁 黄莺<sup>14</sup> 783

#### “蜻蜓”

河南邓州：丁丁 tin<sup>44</sup> tin<sup>0</sup> 蜻蜓 91

重庆：麻灯灯儿 ɛma ɬtin ɬtiər 蜻蜓 方言志 193

重庆：灯灯麻儿 ɬtin ɬtin ɛmər 蜻蜓 方言志 193

四川成都：灯灯猫儿 tin<sup>55</sup> tin<sup>55</sup> mər<sup>55</sup> 蜻蜓 词典 54

贵州织金：竹丁丁 蜻蜓 745

贵州纳雍：绿丁丁 lu<sup>21</sup> tin<sup>55</sup> tin<sup>55</sup> 蜻蜓 840

14 原文“黄莺”を“黄鷹”と誤る。“敲丁丁”は「トンボ」語形“丁丁”に“敲”をくっつけて「(ドアを) ドンドン叩く」というようなダジャレ語形にしたものか？ ダジャレ語形については太田 2006 参照。他に何らかの「ウグイス」以外の鳥(?)を指す“X丁丁”(Xは何らかの修飾要素)をXを“敲”に改めて「ウグイス」名称としたというような可能性もある。但し“X丁丁”が何であったか特定できない。



- 河南卢氏：水丁丁 s<sub>1</sub><sup>32</sup> tɿŋ<sup>44</sup> tɿŋ<sup>0</sup> 蜻蜓 民俗志 108  
 陕西宁陕：杨丁丁 iaŋ<sup>21</sup> tin<sup>34</sup> tin<sup>34</sup> 蜻蜓 714  
 山东寿光：麻蜓蜓 ma<sup>53-55</sup> t<sup>h</sup>ɿŋ<sup>0</sup> t<sup>h</sup>ɿŋ<sup>0</sup> = “麻郎 ma<sup>53-55</sup> laŋ<sup>0</sup>” 蜻蜓之一种 志 131  
 山东荣成：蚂蜻蜓 ma<sup>214</sup> t<sup>h</sup>ɿŋ<sup>42</sup> t<sup>h</sup>ɿŋ<sup>0</sup> 一种体大色绿的蜻蜓 志 151  
 河南内黄：麻蜓蜓 / máfīngtīng / 蜻蜓 FPJ6/106  
 河南郑州：麦蜓蜓 mɛ<sup>24</sup> tɿŋ<sup>24</sup> tɿŋ<sup>0</sup> 蜻蜓 省志 197  
 “斑鸠”  
 陕西扶风：咕咕等 ku<sup>35</sup> ku<sup>02</sup> təŋ<sup>53</sup> 斑鸠；蒲公英 623

“丁丁”という語形ですぐに想起されるのは「トンボ」である。「トンボ」は普通話では“蜻蜓 qīngtīng”と呼ばれるが、多くの方言では双声化を生じて、t<sup>h</sup>ɿŋ t<sup>h</sup>ɿŋ, tɛ<sup>h</sup>ɿŋ tɛ<sup>h</sup>ɿŋ, tɿŋ tɿŋ (tɛɿŋ tɛɿŋ の例は見当たらない) のような音形で現れる。うち tɿŋ tɿŋ は河南省一帯で多く見られるが、この前後に他の要素を付加した～ tɿŋ tɿŋ、tɿŋ tɿŋ～のような語形は上に見るように、他の地域でも散見する。西南部では漢字表記で成都の“蜻蜓猫儿”（“丁丁猫儿”という表記もあり。tin tin～型）という形式が主流を成し、“猫蜻蜓儿”（つまり～ tin tin 型）という形式は殆ど見られない。“蒿丁丁”という「トンボ」語形は見当たらないから、「トンボ」語形の転用とするには、“蒿”についての説明が必要となる。語形との関係も考慮するまでもなかろう。“蒿丁丁”は字面から「タンポポ」と何か関係があるのかも思われるが、タンポポは全国的に見ても“婆婆丁”、“卜卜丁”のような第一、二音節が重ね型の“～丁”という語形しかない上に、この“～丁”の分布域は山東、河北、河南であって、西南、西北には見られない。

“鶺鴒”と“丁丁”とではそもそも音声的類似は十分とは言い難い。既に § 6.6. で見たように、“鶺鴒～”の形式は、“鶺鴒棒”、“鶺鴒木”しか無い上に、“～鶺鴒”という語形は実例が見当たらないから、“鶺鴒”と“丁丁”の音声的類似を契機とした混交というような解釈も成り立ちそうもない。

### § 6.8. “啄木鸟” ↔ “夜鷹”

以下に挙げる「ヨタカ」語形との混交はこの 2 例以外、他に例を見ない。

#### “啄木鸟”

- 山东长岛：贴树皮 t<sup>h</sup>ie<sup>214</sup> ju<sup>42</sup> p<sup>h</sup>i<sup>55</sup> 啄木鸟 74  
 江苏赣榆：贴树皮 t<sup>h</sup>ie<sup>213</sup> jy<sup>42</sup> p<sup>h</sup>i<sup>55</sup> 啄木鸟 133

#### “夜鷹”

- 黑龙江哈尔滨：贴树皮 t<sup>h</sup>ie<sup>44</sup> su<sup>53</sup> p<sup>h</sup>i<sup>24</sup> ①一种附在树干上，颜色跟树皮相近的

## 毛毛虫②夜鷹 词典 154

「ヨタカ」を意味する語形が、「キツツキ」に転用されたと考えられる。《哈尔滨方言词典》では、同方言の「キツツキ」語形は以下の三通りがある。

黑龙江哈尔滨：啄木鸟儿  $tsuo^{24} mu^{53} niaur^{213}$  啄木鸟 词典 145  
 铨得儿木  $pən^{44} tər^{44}$  (或  $tər^0$ )  $mu^{53}$  啄木鸟 词典 317  
 叨木官子  $tau^{44} mu^{53} kuan^{44} tsɿ^0$  啄木鸟 词典 207

本来「ヨタカ」を意味する語が、「キツツキ」に転用されたという考え方とは逆に“貼树皮”が本来「キツツキ」を意味する語であったとする可能性も検討すべきであろう。また“夜猫子フクロウ/ミミズク”<sup>15</sup>と混同されたと思しき例があるが(後述)、“貼树皮”という語形は先に述べたように、上掲の2例しかない。そもそも「ヨタカ」は語彙調査表に載ることの先ず無い語彙で、かなり詳しい語彙集でもほとんど取り上げられることが無い<sup>16</sup>。遺憾ながら、該当例稀少につき、現時点ではこれ以上追及できない。

## § 6.9. “啄树鸟キツツキ” ←→ “斑鳩”? “咕咕猫フクロウ”? “布谷鸟”?

「キジバト」との混同と見るべきか、はたまた「フクロウ」との混同と見るべきか、よく分からない例である。「キツツキ」の語形に“咕咕”が現われる例は類音の別字の使用を考慮しても、以下に記す四番目の山西靈石方言の“鵲树鵲鵲”のような混交によって成立したと思われる語形以外には例が無い (§ 3.2. で詳述)。この靈石方言のような語形が縮約されたという可能性が無いでもないが(“鵲树鵲鵲” → “鵲鵲” → “咕咕” + “头”)、この例もまた孤例といっても良いようなものである。

## “啄木鸟”

甘肃武威：咕咕头 啄木鸟 763<sup>17</sup>

cf. 甘肃兰州：固固头  $ku^{13-11} ku^3 t^həu^1$  头上有一撮毛的一种母鸡 市志 196

cf. 宁夏同心：孤孤头儿  $ku^{13-11} ku^0 t^hər^{53}$  头顶有一簇毛的鸽子 117-118

15 “夜猫子”、“猫头鷹”はフクロウ科の鳥の中で特に「ミミズク」を指すようであるが、小論ではこれに関連する語彙の総称の日本語訳としては、以下「フクロウ」を用いる。

16 湖南方言では数地点で「ヨタカ」の報告例があるが、当面の議論とは拘わらない語形であるので、ここでは取り上げない。

17 並存語形に“啄木虫”がある (p.763)。

- cf. 山东汶上：咕咕头  $ku^{55} ku^0 t^h\dot{a}u^{42}$  脖子上没毛的鸡 152  
 湖南吉首：咕噜头儿  $ku^{35} lu^0 d\dot{e}r^{11}$  啄木鸟 研究 120  
 cf. 湖北襄阳：黄咕噜 黄莺 643  
 山西灵石：鸪树鸪咕咕  $te^h\dot{i}\tilde{a}^{214} su^{53} pa\dot{?}^{33} ku^{214} ku^{214}$  啄木鸟 605  
 “斑鸠”  
 山东新泰：咕咕  $ku^{42} ku^{42}$  斑鸠 志 110  
 河南舞钢：姑姑儿 斑鸠 731  
 河南濮阳：咕咕咕 /  $g\ddot{u}g\ddot{u}g\ddot{u}$  / 斑鸠 民俗 242  
 河南清丰：咕咕咕 斑鸠 463  
 河南舞阳：姑姑口  $ku^{53} ku^0 k^h\dot{o}u^{55}$  斑鸠 71  
 山西沁县：咕咕库  $ku^{213-22} ku^{213} k^h\dot{u}^{55}$  斑鸠 27  
 陕西兴平：咕咕等  $ku^{31-35} ku^{31} t\dot{e}ŋ^{52}$  斑鸠 811  
 宁夏银川：咕咕登  $ku^{44} ku^0 t\dot{e}ŋ^{53}$  斑鸠 方言志 95  
 甘肃张家川：姑姑等  $ku^{24} ku^{24-21} t\dot{e}ŋ^{42}$  斑鸠，因其鸣声似“姑姑，等”故名  
 1413

## “布谷鸟”

- 山西万荣：咕咕鸟  $ku^{33} ku^0 \eta\dot{i}au^{55}$  布谷鸟（县西） 词典 75  
 河南兰考：咕咕鸟  $ku^{35} ku^0 n\dot{i}au^{55}$  大杜鹃，通称布谷鸟 王 44  
 河北故城：古古儿  $ku^{55} kur^0$  布谷鸟 620  
 河南台前：咕咕 布谷鸟 613

この解釈には他にも難点がある。これまでに紹介したように“咕咕”のような要素を持つ名称には「ヤツガシラ」の“屎咕咕”、“臭咕咕”、「カッコウ」の“春咕咕”、「キジバト」の“水咕咕”があった。「キジバト」には他に少数ながら、“水”ではなく“臭”、“春”、“山”、“野”、“突/脱”、“曲”、“鸪”などといった様々な要素が付加されている例があり、また前ではなく、後ろに“口”、“鳩”、“虫”などのようなといった要素を伴うものもある。

## “斑鸠”

- 甘肃敦煌：臭咕咕  $t\dot{s}^h\dot{o}u^{\text{p}} \dot{a}k\dot{y} \cdot k\dot{y}$  斑鸠 普通 3711  
 山东苍山：春咕咕  $pf^h\dot{e}^{213} ku^{53-55} ku^0$  斑鸠 173  
 河北保定：山咕咕  $\dot{e}\dot{s}an \dot{a}ku \cdot ku$  斑鸠 普通 3711  
 山西阳城：水咕咕  $\dot{s}uei^{312} ku^{53} ku^{53}$  斑鸠 425  
 山东平原：野咕咕 /  $ye^{21} gu^{55} gu^{21}$  / 斑鸠 726  
 陕西神木：突咕咕  $t^h\dot{u}\dot{a}\dot{?}^4 ku^{53} ku^{21}$  斑鸠 研究 360 ←→ “猫头鹰”

- 陝西神木：脱故故 t<sup>h</sup>uəʔ<sup>3</sup> ku<sup>51</sup> ku<sup>0</sup> 斑鳩 陝北 140  
 陝西延安：曲故故 tɕ<sup>h</sup>y<sup>213-21</sup> ku<sup>51</sup> ku<sup>0</sup> 斑鳩 陝北 140  
 江苏扬州：鸪咕咕 pəʔ<sub>2</sub> ɔku • ku 斑鳩 普通 3711  
 江苏南京：斑咕咕 paŋ<sup>31-33</sup> ku<sup>31-33</sup> ku<sup>31</sup> 斑鳩 词典 206  
 四川长寿：谷姑姑 ɔku ɔku ɕku 1. 斑鳩 2. 喻说话抓不住要领的人 1070

- 河南舞阳：姑姑口 ku<sup>53</sup> ku<sup>0</sup> k<sup>h</sup>ou<sup>55</sup> 斑鳩 71  
 山西沁县：咕咕库 ku<sup>213-22</sup> ku<sup>213</sup> k<sup>h</sup>u<sup>55</sup> 斑鳩 27  
 山西忻县：咕咕咕 ku<sup>31</sup> ku<sup>31</sup> tɕiəu<sup>53</sup> 斑鳩 590  
 山西文水：咕咕种 ɔku ɔku tsuəŋ<sup>ɿ</sup> 斑鳩 县志 704  
 河南濮阳：咕咕虫 ku<sup>33-34</sup> ku<sup>34</sup> tɕ<sup>h</sup>uŋ<sup>452-42</sup> 斑鳩 500  
 河南杞县：咕咕猫 ku<sup>55</sup> ku<sup>0</sup> miəu<sup>24</sup> 斑鳩 854 (フクロウとキジバトの混同)

しかしながら、「キジバト」の語形に“咕咕等/登”のような語形はあるが、“咕咕头”は見当たらない。そして「キツツキ」の語形でも“~头”というのは管見の及ぶ限りで、二番目の湖南吉首方言の例とこの甘肅武威の2例のみ。大多数は接尾辞を伴わない“~木”型か“~木子”、“~木儿”といったものである。擬声語“咕咕”に“头”を附した一種幼児語的性格の語とも考えられるが、実物をよく知っているならば、中国でも「キツツキ」が“咕咕”と鳴くと認識されているとは考え難い。そのような「キジバト」語形が「キツツキ」に転用されたものというのが、現在のところ最も蓋然性の高い説と言えようが、“咕咕头”という「キジバト」語形は見当たらない。甘肅武威方言は接尾辞“头”を多用する方言とは思えないので、単純に指示対象の混同と考えてはいけないのかもしれない。語源が“咕咕鸟”で、末尾の“鸟[t-]”が声母を[n-]に改めるといようなタブー語回避の方法ではなく<sup>18</sup>、類音の接尾辞“头”に取り替えられたということはあるだろうか？ もしそうであれば、“咕咕等/登”の“等/登”、“咕咕种”の“种”、“咕咕虫”の“虫”はいずれも同様に“鸟[t-]”が特殊変化して成立したものである可能性がある。

「フクロウ」には“咕咕猫”という語形があり、「キジバト」の“咕咕”と音声的類似を持つが、やはり“咕咕头”という語形は見られない。甘肅武威の“咕咕头キツツキ”が指示対象の混同でなく、混交を想定するにしても、「フクロ

18 厳密に言えば、「トリ」の名称が「男性性器」の派生義を持つようになったため、正当な字音 diao は専らこの意味に用いられるようになり、「トリ」の意味ではこれと区別すべく、発音をずらして niao としたということである。1語が2語に分裂するに至るのにタブー語との同音忌避が関わったのである。

ウ」語形で“～頭”となるのは“猫耳頭”のみだから、先ずは“屎咕咕ヤツガシラ”、“臭咕咕ヤツガシラ”、“春咕咕カッコウ”といった語形と“咕咕猫フクロウ”との間で混交が起き、「ヤツガシラ」若しくは「カッコウ」を意味する語形“咕咕頭”が生まれ、それが「キツツキ」に転用されたということになるろう。しかしながら“屎咕咕”、“臭咕咕”、“春咕咕”と“咕咕猫”とは音声的に共通する要素があるとは言え、混交を生じるほどの音声的類似があるとは思えない。それにそうであるならば、先ずは「キジバト」の“\*咕咕頭”の成立以前に、「フクロウ」に関し、“咕咕猫”と“猫耳頭”の二つの方言語形の衝突で“咕咕頭”という例があつてしかるべきだが、そのような例は全く見られない。

### “猫头鹰”

- 河北滦南：咕咕鸟儿  $ku^{55-53} ku^0 niaur^{55}$  猫头鹰，注意，鸟读去声 819  
 天津蓟县：咕咕鸟儿  $ku^{51} ku^{20} niaur^{55}$  猫头鹰 905  
 河北遵化：咕鸟  $ku^{51} niau^{55}$  猫头鹰 599  
 河北邢台：咕咕又 猫头鹰 622  
 山东招远：咕咕苗儿  $ku^{33} ku^{33} miaur^{52}$  猫头鹰 822  
 河南开封：咕咕□  $ku^{55} ku^{55} miaor^{24}$  猫头鹰 县志 541  
 河南郑州：咕咕猫  $ku^{24} ku^{24} miau^{24}$  猫头鹰 省志 194（＝河南许昌）  
 河南开封：咕咕猫儿  $ku^{24} ku^0 miaur^{24}$  猫头鹰 省志 194  
 陕西韩城：咕咕猫 猫头鹰（＝大荔）渭南地区 918  
 河南淇县：咕咕喵  $ku^{34} ku^0 miau^{55}$  猫头鹰 945  
 山西永济：咕咕喵  $ku^{21} ku^0 miau^{42}$  猫头鹰 36  
 陕西高陵：咕咕喵  $ku^{55} ku^{55} miau^{51}$  猫头鹰 964  
 河南商丘：猫耳头  $mau^{53} \text{ər}^{55} t^h\text{ou}^{53}$  猫头鹰（＝周口、信阳）省志 194  
 河南确山：猫儿头  $mau^{53} \text{ər}^{55} t^h\text{ou}^{53}$  猫头鹰 省志 194  
 河南新县：猫儿头  $mau^{54} \text{ə}^{211} t^h\text{ou}^{45}$  635  
 河南新县：猫儿头 猫头鹰 民俗志 113（＝河南鹿邑 753；周口 652）  
 河南上蔡：猫儿头 /  $mao^{52} \text{er}^{31} \text{tou}^{53}$  / 猫头鹰 652  
 河南扶沟：猫儿头  $mao^{53} \text{ər}^0 t^h\text{ou}^{53}$  猫头鹰 650  
 河南周口地区：猫儿头  $\text{m}\text{ə} \text{ər} \text{t}^h\text{ou}$  猫头鹰 897  
 河南永城：猫头子  $m\text{ə}^{52} t^h\text{ou}^{52} \text{ts}\text{ɿ}^0$  猫头鹰 570

上掲の“啄木鸟”举例中二番目の湖南吉首方言の場合は“黄咕噜ウグイス”が関与している可能性があるが、データ未収集につき、指摘のみに留めておく。いずれにせよ別個に論ずべきものであろう。

なお既に紹介した例ではあるが、以下の「キジバト」の成立には、恐らく「フクロウ」語形が関与している。

### “斑鳩”

陝西神木：突咕咕 t<sup>h</sup>uəʔ<sup>4</sup> ku<sup>53</sup> ku<sup>21</sup> 斑鳩 研究 360

陝西神木：脱故故 t<sup>h</sup>uəʔ<sup>3</sup> ku<sup>51</sup> ku<sup>0</sup> 斑鳩 陝北 140

cf. 河南杞县：咕咕喵 ku<sup>55</sup> ku<sup>0</sup> miau<sup>24</sup> 斑鳩 854

### “猫头鷹”

河南淇县：秃叫 t<sup>h</sup>uəʔ teiau<sup>213</sup> 猫头鷹 945

河南鄆城：秃雀 t<sup>h</sup>u<sup>42</sup> te<sup>h</sup>iau<sup>31</sup> 猫头鷹 657

山西襄垣：突雕 t<sup>h</sup>uəʔ<sup>213</sup> tia<sup>11</sup> 猫头鷹 30

山西平鲁：突斯怪 t<sup>h</sup>uəʔ<sup>12-2</sup> sɿ<sup>324</sup> kuei<sup>53</sup> 枭鸟、夜鷹 81

山西原平：秃思角 t<sup>h</sup>uɿʔ<sup>4</sup> sɿ<sup>213-13</sup> teiɿʔ<sup>4</sup> 猫头鷹 74

陝西神木の二つの例の第一音節は文献により漢字表記、声調調値に違いが見られるが、同じ音声形式と考えて良い。“突”、“脱”で表記されているこの要素は恐らく上掲の「フクロウ」語形との混交により、何も無かったところに新たに付け加えられたものか、本来あった何らかの要素と取り換えたということだろう。後者の場合、それが何であったか私案は今のところ無い。河南杞県の例は恐らく「フクロウ」語形が「キジバト」に転用されたもの。

### § 6.10. 混交 “啄木鸟：啄木鸟” ↔ “咕咕猫：猫头鷹 1”

以下は指示対象の混同ではなく、混交によって語形が変わったと思われる例である。まずは「キツツキ」の“叨树虫”若しくは“叨树斡（斡）”と「フクロウ」の“(咕咕)猫”の混交と考えられる例である。

#### “啄木鸟”（“叨树虫”型）

河南郑州：叨树喵 tau<sup>24</sup> ʂu<sup>312-31</sup> miau<sup>42</sup> 啄木鸟 85 ← “啄木鸟”？

河南郑州：叨树喵儿 tau<sup>24</sup> ʂu<sup>312-31</sup> miau<sup>42</sup> 啄木鸟 85 ← “啄木鸟儿”？

河南郑州：叨树喵 t<sup>h</sup>tau ʂu<sup>ʔ</sup> ɛmiau [ɛmau] 啄木鸟 普通 3713

←→ “咕咕喵 ku<sup>42</sup> ku<sup>0</sup> miau<sup>24</sup> 猫头鷹” “喵叨树～” miau<sup>42</sup> ≠

“咕咕咕～” miau<sup>24</sup>

河南郑州：叨树猫 tau<sup>24</sup> ʂu<sup>31</sup> mau<sup>0</sup> 啄木鸟 市志 569

河南郑州：叨树猫 tau<sup>24</sup> ʂu<sup>31</sup> ma<sup>53</sup> 啄木鸟 省志 195

河南卫辉：叨树虫 啄木鸟 645 (=甘肃平凉 711)  
 河南安阳：叨树虫 / dāo shù chóng / 啄木鸟 FPJ6/104  
 河南安阳：叨树虫 tau<sup>33</sup> su<sup>213</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>53</sup> 啄木鸟 省志 195  
 河南平顶山：叨树虫 tau<sup>35</sup> ʂu<sup>41</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>342</sup> 啄木鸟 研究 119  
 河南获嘉：叨树虫 tau<sup>33-31</sup> ʂu<sup>13</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>31</sup> 啄木鸟 研究 198、课本 461  
 宁夏隆德：叨树虫 tɔu<sup>24</sup> ʂu<sup>44</sup> tʂ<sup>h</sup>uŋ<sup>24</sup> 啄木鸟 概要 110<sup>19</sup>  
 甘肃平凉：叨树虫 啄木鸟 711、陇下 24

山西灵丘：找树虫 tʂɔu<sup>44</sup> su<sup>52-24</sup> ts<sup>h</sup>uəŋ<sup>312</sup> 啄木鸟 38  
 山西长子：啄树虫 tʂuəʔ<sup>4</sup> su<sup>53</sup> ts<sup>h</sup>uŋ<sup>24-0</sup> 啄木鸟 43  
 山西浑源：啄树虫 tʂau<sup>22</sup> su<sup>214</sup> ts<sup>h</sup>uə<sup>22</sup> 啄木鸟 799  
 山西代县：啄 [tʂɔ] 树虫 啄木鸟 469  
 山西襄垣：啄树禽 tʂuəʔ<sup>213</sup> su<sup>55</sup> te<sup>h</sup>iŋ<sup>11</sup> 啄木鸟 30  
 山西岢岚：啄树雀儿 啄木鸟 586  
 湖北阳新：啄树□ tso<sup>33</sup> ɕy<sup>33</sup> tsin<sup>45</sup> 啄木鸟 110 ← “啄树雀儿”？  
 “啄木鸟”（“啄树铍铍”型）

河南新乡：叨树梆 tau<sup>33</sup> sɥ<sup>31</sup> paŋ<sup>33</sup> 啄木鸟 省志 195  
 河南舞阳：叨树斑斑儿 tau<sup>24</sup> ʂu<sup>31</sup> paŋ<sup>24</sup> paŋ<sup>31</sup> 啄木鸟 71  
 河南卫辉：叨树邦邦 啄木鸟 645  
 河南辉县：叨树梆梆 tau<sup>44</sup> sɥ<sup>213</sup> paŋ<sup>44</sup> paŋ<sup>0</sup> 啄木鸟 816  
 河南延津：叨树梆梆 / dao<sup>35</sup> shu<sup>53</sup> bang<sup>35</sup> bang<sup>35</sup> / 啄木鸟 796<sup>20</sup>  
 河南密县：刀树梆梆儿 啄木鸟 601  
 河南舞钢：刀树斑伴儿 啄木鸟 731<sup>21</sup>  
 河南开封：叨树梆子 / dāo shù bāngz / 啄木鸟 FPJ6/104  
 “猫头鹰”

河南沈丘：树猫子 猫头鹰 611  
 河南项城：树猫子 / shu<sup>31</sup> mao<sup>53</sup> zi<sup>0</sup> / 猫头鹰 667

“啄木鸟”（“啄树鸟”型）

山西长治：啄树鸟 tʂuəʔ<sup>54</sup> su<sup>53-45</sup> niar<sup>535-53</sup> 啄木鸟 79  
 安徽歙县：啄树鸟 tʂɔʔ<sup>21</sup> ɕy<sup>33</sup> tiə<sup>45</sup> 啄木鸟 652  
 江苏东海：啄树鸟 tʂuəʔ<sup>5</sup>/tuəʔ<sup>5</sup> ʂu<sup>41-31</sup> niə<sup>35</sup> 啄木鸟 研究 154

19 “叨”、原文“叨”に誤る。

20 shu<sup>53</sup>、原文shr<sup>53</sup>に誤る。

21 “刀”、原文“刁”に誤る。

“叨树铤(铤)” もそれ自体が“啄树虫”と“树铤(铤)”の混交形式である可能性がある。

### “啄木鸟” (“树铤(铤)” 型)

内蒙古准格尔：树蹦蹦	啄木鸟	552
山西平鲁：树铤铤 su <sup>52</sup> pəu <sup>0</sup> pəu <sup>0</sup>	啄木鸟	研究 152
山西右玉：树铤铤 ʂu <sup>24</sup> pə̃y <sup>31</sup> pə̃y <sup>31</sup>	啄木鸟	138
山西阳高：树奔奔	啄木鸟	629
内蒙准格尔：树蹦蹦	啄木鸟	552
河南封丘：树梆梆 ʂu <sup>31</sup> paŋ <sup>24</sup> paŋ <sup>0</sup>	啄木鸟	654
河南长垣：树梆梆	啄木鸟	572
山西天镇：树铤铤 ʂu <sup>32</sup> pɤy <sup>31</sup> pɤy <sup>31-0</sup>	啄木鸟	37
河北涿鹿：树铤	啄木鸟	595
山西偏关：树铤子	啄木鸟	669
河南原阳：树梆子 / shù bāngz /	啄木鸟	FPJ6/107

しかし“树铤(铤)”は稀少語形であり、曾て優勢を極めたとも思えないから、詳しく検討するまでもないを考える。

“叨树喵/猫”は河南鄭州の一地点のみ。周囲を見ても“啄树虫(子/儿)”しか見当たらない。一見音声的類似から、“叨树鸟(子/儿)”(←“啄树鸟(子/儿)”)と“树猫子フクロウ”との混交によるものかとも考えられるが、この解釈には難点がある。その一つは既に指摘したように、“啄树鸟(子/儿)”の報告例が稀少であることである。管見の及ぶ限りで、該当するものは上掲の3地点に留まる。数が少ないので、安易に一般化すべきではないが、この語形には第一音節が tau のようになっている例は無い。恐らく“叨树喵/猫”を成立せしめた「キツツキ」語形の方は、既に本節冒頭に記したように、“啄树虫(子/儿)”若しくは“叨树铤(铤)”であろう。「フクロウ」語形の方の候補“树猫子”についても報告例はまた稀少である。やはり本節冒頭に示した如く、広く見られる“咕咕猫”が混交に関与したと見るべきだろう。

なお「フクロウ」語形で“喵/猫/猫”が“鸟”に置き換えられる例が見られるのは“咕咕猫”→“咕咕鸟”といった語形のみで、しかも報告例は河北省地域に限られる。もう一点、補足すると「フクロウ」の語彙に見られる m- 声母の音節は“猫”を本字とするが、「猫」を [mau] (陰平) のように発音する方言でも、「フクロウ」語形に現われる“猫”については [miau] のように拗介音を持つ形になっている場合が多く、声調も陰平でなく、陽平であることが多



い。そのため、“喵”、“苗”その他の当て字が成される場合が多い。中に“猫”で表記され、声調が陰平となっている例も散見するが、恐らくそれは、「ネコ」の字音が“猫”の読みの代表権を獲得して、「フクロウ」語形にも類推適用された結果であろう（但し、以下の例では声調に関してのみ）。

‘猫头鹰’

- 河北平乡：咕喵儿 ku<sup>44</sup> miaur<sup>0</sup> 猫头鹰 865  
 山东招远：咕咕苗 ku<sup>33</sup> ku<sup>33</sup> miaur<sup>52</sup> 猫头鹰 822  
 河南开封：咕咕□ ku<sup>55</sup> ku<sup>55</sup> miaor<sup>24</sup> 猫头鹰 县志 541  
 河南郑州：咕咕猫 ku<sup>24</sup> ku<sup>24</sup> miau<sup>24</sup> 猫头鹰 省志 194（=河南许昌）  
 河南开封：咕咕猫儿 ku<sup>24</sup> ku<sup>0</sup> miaur<sup>24</sup> 猫头鹰 省志 194  
 河南淇县：咕咕喵 ku<sup>34</sup> ku<sup>0</sup> miau<sup>55</sup> 猫头鹰 945  
 山西永济：咕咕喵 ku<sup>21</sup> ku<sup>0</sup> miau<sup>42</sup> 猫头鹰 36  
 陕西高陵：咕咕喵 ku<sup>55</sup> ku<sup>55</sup> miau<sup>51</sup> 猫头鹰 964  
 河北成安：咕咕喵 猫头鹰 777（山东烟台福山 600；甘肃榆中 743）  
 河南许昌：咕咕喵 / gūgūmiāo / 猫头鹰 817  
 山东平度：咕咕鹊儿 ku<sup>214</sup> ku<sup>0</sup> miōr<sup>214</sup> 猫头鹰 155  
 山东烟台：咕咕喵 ku<sup>31</sup> ku<sup>31-35</sup> miao<sup>31</sup> 猫头鹰 201  
 河北肃宁：咕咕喵 ku<sup>22</sup> ku<sup>0</sup> miau<sup>53</sup> 猫头鹰 162  
 河北魏县：咕咕喵子 / gūgūmiāodê / 猫头鹰 FPJ6/116  
 河北任丘：咕咕苗子 猫头鹰 632  
 河南义马：谷谷庙 猫头鹰 民俗 125  
 山西平陆：咕咕秒 ku<sup>33</sup> ku<sup>0</sup> mia<sup>53</sup> 猫头鹰。声如“咕咕 mia”。色似麻雀，有白色，比麻雀大 578

---

河南杞县：咕咕喵 ku<sup>55</sup> ku<sup>0</sup> miau<sup>24</sup> 斑鸠 854

---

- 天津武清：咕鸟子 猫头鹰 189  
 河北滦南：咕咕鸟儿 ku<sup>55-53</sup> ku<sup>0</sup> niaur<sup>55</sup> 猫头鹰，注意，鸟读去声 819  
 天津蓟县：咕咕鸟儿 ku<sup>51</sup> ku<sup>20</sup> niaur<sup>55</sup> 猫头鹰 905  
 河北乐亭：咕咕鸟儿 ku<sup>54</sup> ku<sup>0</sup> niaur<sup>34</sup> 猫头鹰 905  
 河北遵化：咕鸟 ku<sup>51</sup> niaur<sup>55</sup> 猫头鹰 599

“叨树铤(铤)”同様、“叨树虫”もまたそれ自体が混交形式である可能性がある。このどちらの語形も河南省に多く見られる語形で、本節で議論の主対象と

している“叨树猫(猫)”もまた河南省で見かける語形であるので、その成立に  
関与しているであろうことは想像に難くない。

ここで“叨树虫”が混交形式であるのか否か、少し検討してみよう。この形  
式は“啄树虫(子/儿)”(初頭音節声母が ts-, tʂ- で現れるタイプ)を含めても、  
その報告例は数量的にみて“啄木鸟”に遥かに及ばない。この語形は既に指摘  
したように、報告例の多くは河南、山西方言である(山東方言は1地点のみ)。  
“啄树虫(子/儿)”もまた何らかの二つの異なる方言形のぶつかり合いで出来  
たものか。そうであれば、“啄木虫(子/儿)”と“啄树铮铮(子/儿)”であろ  
うか。後者は“树”と“铮”の要素を持つほかの語形を想定すべきかも知れな  
い。この推論には難点がある。それは“啄木虫(子/儿)”の報告例の多くが山  
東方言のもので、“啄树虫(子/儿)”の分布域とは重ならないということであ  
る。ただ“啄木鸟”における“啄”の声母が t- となっている例が非常に多い  
のに比べ、“啄树鸟”の形式の“啄”の声母が t- である例は殆ど無い。このこ  
とから概略“啄树鸟”の出現は“啄木鸟”より遅いと言って良いだろう。西北  
に分布する“啄木虫(子/儿)”の方は、数は少ないが、“啄”の声母が t- であ  
る例が見られる。

「フクロウ」との類推が働いて変化したと見られる上掲河南鄭州方言の「キ  
ツツキ」語形“叨树猫(儿)”、“叨树猫”の“啄>叨”が t- であることはその  
成立がかなり古いことを窺わせる。

“啄(tʂ-, ts-)木鸟”の形式にはこのような類推が働いたと思われる例は見られ  
ない。

山东诸城：啄木虫 tʂuə <sup>55-214</sup> mu <sup>0</sup> tʂ <sup>h</sup> əŋ <sup>53</sup>	啄木鸟	123
山东高密：啄木虫 tθuə <sup>44-213</sup> mu <sup>21</sup> tʂ <sup>h</sup> əŋ <sup>42</sup>	啄木鸟	山东方言词典 90
山东黄岛：啄木虫儿 tʂuə <sup>53</sup> mu <sup>0</sup> tʂ <sup>h</sup> oŋr <sup>53</sup>	啄木鸟	554 (青岛市黄岛)
山西屯留：啄木虫 tsuəʔ <sup>45</sup> məʔ <sup>45</sup> ts <sup>h</sup> uəŋ <sup>13</sup>	啄木鸟	34
甘肃敦煌：啄木虫 tuə <sup>44</sup> mu <sup>31</sup> tʂ <sup>h</sup> uə̃ <sup>24</sup>	啄木鸟	87 (后面“啄”原文误作“喙”)
山东潍坊：啄木子虫 tuə <sup>213</sup> ma <sup>0</sup> tsɿ <sup>0</sup> tʂ <sup>h</sup> uŋ <sup>53</sup>	啄木鸟	740
河北大城：凿木虫子	啄木鸟	河北词汇 118
宁夏中卫：剝木虫子 tuə <sup>13</sup> mu <sup>13-44</sup> tʂ <sup>h</sup> uŋ <sup>53</sup> tsɿ <sup>0</sup>	啄木鸟	106
山东潍坊坊子：剝木虫	啄木鸟 (=寒亭)	潍坊 92
山东高密：剝木虫	啄木鸟	潍坊 92
青海西宁：啄木虫 tuo <sup>44</sup> mu <sup>44</sup> tʂ <sup>h</sup> uə̃ <sup>24</sup>	啄木鸟	词典 82
新疆哈密：剝木虫 tuɣ <sup>213</sup> mu <sup>21</sup> tʂ <sup>h</sup> uŋ <sup>51</sup>	啄木鸟	137
甘肃岷县：剝木虫儿	啄木鸟	728

\* 本論文は、同タイトルの(1)同様、平成25年度科学研究費補助金(基盤B)(研究課題名:「漢語諸方言における周辺諸言語との言語接触による類型推移現象の実証的研究」、課題番号22320079)の研究成果の一部である。

(未完待続)